

七尾東遺跡発掘調査報告書

—第1次・第2次・第3次—

2002年3月

吹田市教育委員会

序

吹田市では、これまで公共事業および民間の開発等に伴い、数々の発掘調査を実施してきました。

七尾東遺跡につきましては、平成4年に民間による開発に伴い実施した発掘調査によって発見された遺跡です。ここでは、弥生時代の竪穴式住居跡が確認され、これまで本市南東部の岸部地域においては、実態が明らかでなかった弥生時代の遺跡の一端をうかがい知ることができました。さらに、吹田市で弥生時代の建物跡が確認された遺跡として、垂水遺跡に次いで2例目の遺跡となりました。

本報告書は、この七尾東遺跡における初めての発掘調査と、その後の調査の成果をまとめたものです。本書が、吹田市の弥生時代を解明していく上での資料となり、市民の皆様方に、地域の歴史を知っていただく機会となれば幸いです。

平成14年3月

吹田市教育委員会
教育長 椿原正道

例 言

1. 本書は、平成4年に実施した吹田市岸部北5丁目4-1・55-1における七尾東遺跡第1次発掘調査の成果、および平成5年・平成6年に実施した吹田市山田南1124-5他における第2次・第3次発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は、第1次調査を吹田市立博物館文化財保護係田中充徳が担当し、第2次・第3次調査を同係賀納章雄が担当した。整理作業については、吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館内資料整理室において実施し、資料の保管も同所において行っている。
3. 本文の執筆は、第2章を田中、第1章・第3章を賀納が分担した。
4. 図中の方位は磁北を示し、標高はT. P（東京湾標準潮位）を示す。
5. 発掘調査においては、建築事業者である小寺重雄氏、高木正一氏をはじめ、多くの方々の協力を得ました。記して感謝致します。
6. 発掘調査および資料の整理作業には以下の方々の参加を得た。
(発掘調査) 大城道則、福住日出雄、城田健一、世木博
(整理作業) 花崎晶子、秋山芳恵、小川里美、木船安紀子、桑原暢子、高井明美、
長谷部裕子、林裕子

目 次

第1章 位置と環境	1
第2章 第1次調査	3
第3章 第2次・第3次調査	14

挿図目次

第1図 弥生時代遺跡分布図	1
第2図 七尾東遺跡発掘調査地周辺図	2
第3図 第1次調査区配置図	3
第4図 第1次調査土層断面図	4
第5図 第1次調査遺構平面図(1)	7・8
第6図 第1次調査遺構平面図(2)	9
第7図 第1次調査遺物実測図(1)	10
第8図 第1次調査遺物実測図(2)	11
第9図 第2・3次調査区平面図	15
第10図 第2・3次調査土層断面図(T1~T10)	16
第11図 第2・3次調査土層断面図(T11北壁)	17
第12図 第2・3次調査遺構平面図	19・20
第13図 第2・3次調査SK9実測図	21
第14図 第2・3次調査SK12実測図	21
第15図 第2・3次調査遺物実測図	23
第16図 七尾東遺跡遺構図	25

写真目次

写真1 第1次調査1	26	写真7 第2・3次調査1	32
写真2 第1次調査2	27	写真8 第2・3次調査2	33
写真3 第1次調査3	28	写真9 第2・3次調査3	34
写真4 第1次調査4	29	写真10 第2・3次調査4	35
写真5 第1次調査5	30	写真11 第2・3次調査5	36
写真6 第1次調査6	31		

報告書抄録

ふりがな	ななおひがしいせきはくつちょうさほうこくしょ —だい1じ・だい2じ・だい3じ—
書名	七尾東遺跡発掘調査報告書 —第1次・第2次・第3次—
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	田中充徳 賀納章雄
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL (06) 6384-1231
発行年月日	西暦2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ななおひがしいせき 七尾東遺跡	すいたしきしべきた 吹田市岸部北 5丁目4-1, 55-1	27205	123	34° 47′ 9″	135° 32′ 7″	(第1次) 19920515~ 19920606	(第1次) 138	店舗ビル の建設
	すいたしやまだみなみ 吹田市山田南 1124-5 他			34° 47′ 11″	135° 32′ 8″	(第2次) 19930920~ 19931006	(第2次) 62	共同住宅 の建設
				34° 47′ 11″	135° 32′ 8″	(第3次) 19940526~ 19940617	(第3次) 110	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
七尾東遺跡	集落遺跡	縄文	溝?	縄文土器	なし
		弥生	竪穴式住居、 柱穴、土坑、溝	弥生土器 石包丁、石鏃	なし
		古墳	なし	土師器、須恵器	なし
		中世	なし	土師器、須恵器、 瓦器、白磁、土錘	なし

第1章 位置と環境

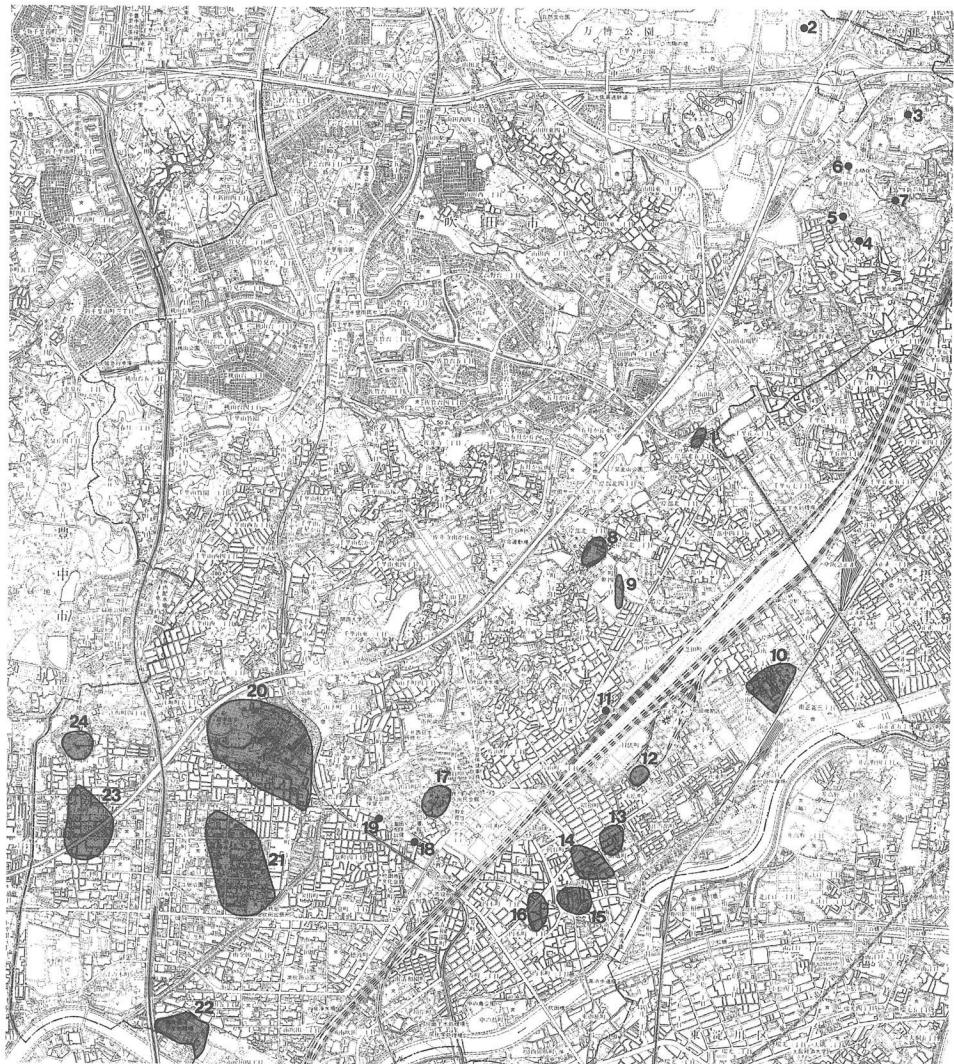
七尾東遺跡は、吹田市岸部北5丁目・山田南に所在する。遺跡は、千里丘陵中を流れる正雀川がちょうど丘陵部から平野部へと流れ出る、標高15～16mの平野部に位置する。そして、遺跡包蔵地の中央を正雀川が西から東へと流れる形となり、遺跡付近一帯では、千里丘陵を供給源とする土砂の堆積が認められる。

七尾東遺跡は、平成4年に発見された弥生時代を中心とする集落遺跡であるが、吹田市においては、垂水遺跡が弥生時代の高地性集落として従来より知られている。垂水遺跡は弥生時代後期にその盛期をもち、標高54m付近の千里丘陵上において竪穴式住居跡、掘立柱建物跡などが検出されている。また、目俵遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての掘立柱建物跡が8棟検出されている。

吹田市において弥生時代の建物跡が確認されている遺跡は、上記の垂水遺跡と目俵遺跡、そして

【遺跡名】

1. 七尾東遺跡
2. 山田銅鐸出土地
3. 青葉丘遺跡
4. 新芦屋遺跡 A地点
5. 新芦屋遺跡 B地点
6. 新芦屋遺跡 C地点
7. 新芦屋遺跡 D地点
8. 吉志部遺跡
9. 原東遺跡
10. 中ノ坪遺跡
11. 天道遺跡
12. 目俵遺跡
13. 高城遺跡
14. 高城 B遺跡
15. 高浜遺跡
16. 都呂須遺跡
17. 片山公園遺跡
18. 泉遺跡
19. 北泉遺跡
20. 垂水遺跡
21. 垂水南遺跡
22. 五反島遺跡
23. 蔵人遺跡
24. 榎坂遺跡

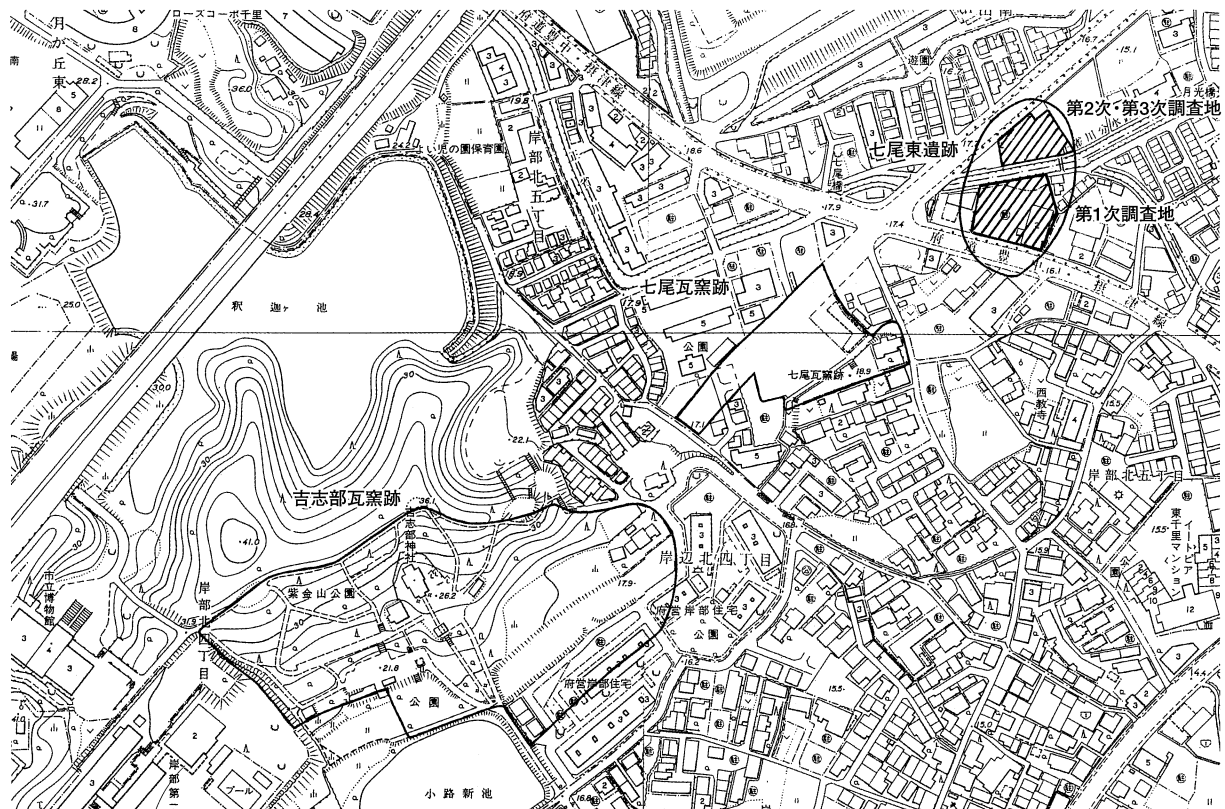


第1図 弥生時代遺跡分布図（1：50,000）

本書で報告する七尾東遺跡の3遺跡であるが、中ノ坪遺跡では、弥生時代後期の周溝状の溝が2条検出されており、天道遺跡においても弥生時代後期の溝とみられる落ち込み跡が検出されている。さらに、榎坂遺跡では、多量の弥生時代・古墳時代の遺物とともにピットや土坑、溝などの遺構が認められており、垂水南遺跡でも弥生土器片をともなって溝が検出されている。

また、遺構は確認されていないが、市内には弥生時代の遺物の出土をみる遺跡は多い。かつての山田小川村においては、明治時代に溜池の開削工事にともなって銅鐸が出土しており、現在の万博公園内にその出土地点が推定されている。また、北泉遺跡では、千里丘陵が平野部に接していく丘陵斜面上において、弥生時代前期から後期にかけての遺物が良好な遺存状態で多数出土しており、また、平安時代から室町時代の河道跡を検出した五反島遺跡においても良好な状態で弥生時代の遺物が得られている。このほか、市内で弥生時代の遺物が認められる遺跡をあげると、蔵人遺跡、泉遺跡、都呂須遺跡、高浜遺跡、高城遺跡、高城B遺跡、原東遺跡、吉志部遺跡、片山公園遺跡、新芦屋遺跡、青葉丘遺跡などがあり、丘陵部から平野部にかけて市内広くに分布している。

このように、吹田市内には弥生時代に関連する遺跡が多くあることがわかる。しかし、先述のように、市内で弥生時代の建物跡を検出した遺跡は七尾東遺跡を含めて3遺跡のみで、弥生時代の人々の生活の場と出土遺物などを直接関連づけてみることのできる遺跡は決して多くない。この点で、本書で報告する七尾東遺跡は、生活の場とそれを取りまく空間が部分的にも明らかとなり、今後、吹田市内の弥生時代を考えていく上で基礎的資料となるものといえる。



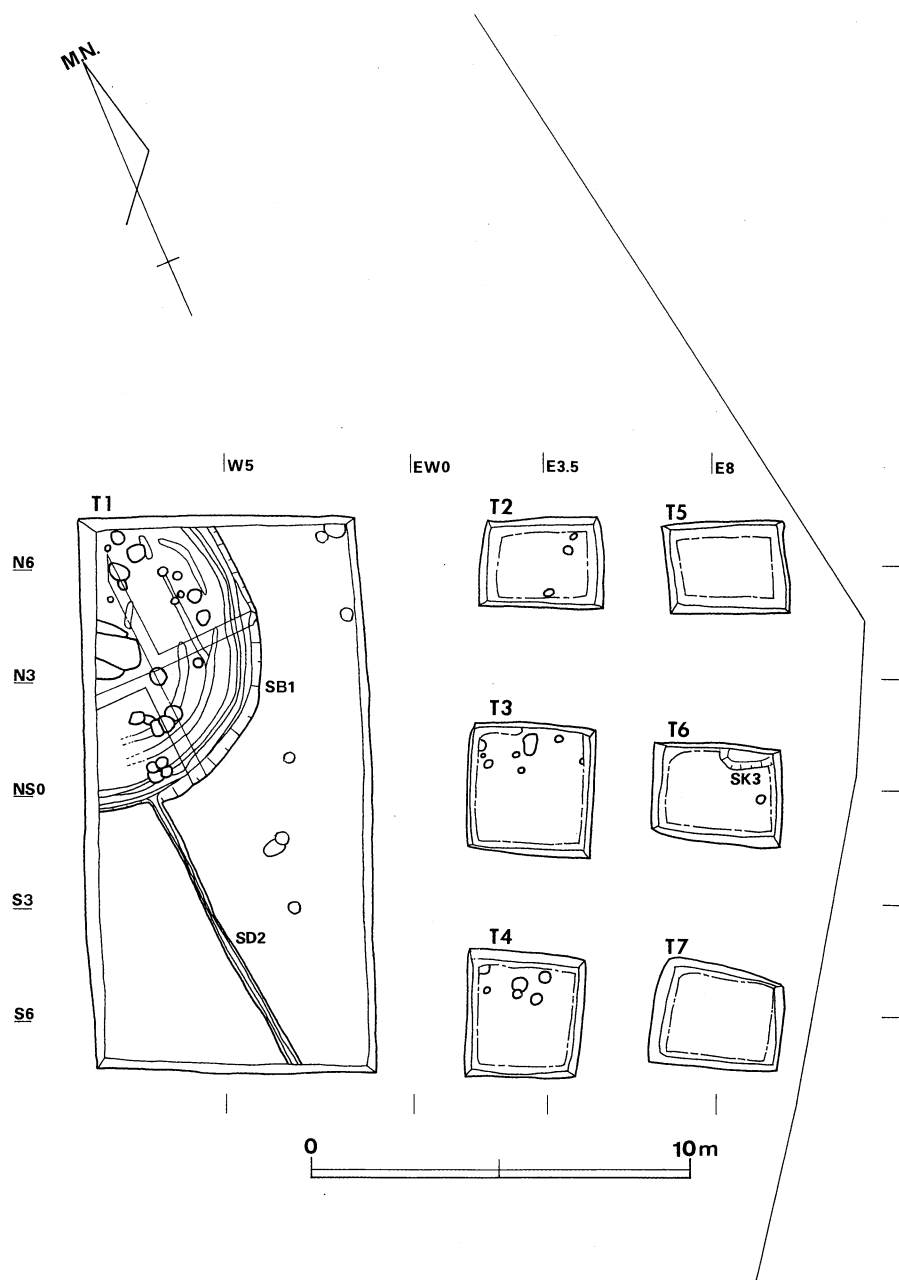
第2図 七尾東遺跡発掘調査地周辺図 (1 : 5,000)

第2章 第1次調査

1. 調査の経緯

今回の発掘調査は、店舗ビル建設工事に伴う事前調査である。吹田市岸部北5丁目4-1、55-1において、平成4年5月15日から6月6日にかけて実施した。調査は、当該工事予定地内において、6×14mの調査区1か所(T1)、3×3mの調査区6か所(T2～T7)を設定し(T1～7の総面積約138㎡)、耕土層から淡灰色粘土層までの各層については、重機による機械掘削を行い、機

械掘削を終えた調査区から順次人力掘削を開始し、注意深く調査を進めた。そして、中世及び古墳時代の遺物包含層を検出後、詳細な観察によって、調査区内(T1～T4・T6)から、土坑、ピット、竪穴式住居跡およびこれに接続するとみられる溝跡等の遺構を検出した。これらの遺構については、写真撮影、土層断面図・遺構平面図等の作成などの記録作業を行い、6月6日において現地説明会を行ったのち、調査を終了した。



第3図 第1次調査区配置図(1:200)

2. 調査の成果

(1) 基本土層序 (第4図)

調査地の現在の地表面は標高 (T.P.) 約 16.5m であり、耕土である現地表面から調査地南側を通る府道豊中・摂津線歩道上との比高差は約 86cm である。さて、調査地内の土層序は、大別して厚さ約 20 cm の耕土層

(表土層、I層) 以下、黄褐色砂質土層 (II層)、淡灰色砂質土層 (III層)、黄褐色粘質土層 (IV層)、淡灰色・灰白色の粘土層 (V層)、暗灰色・暗褐色・褐色の粘土層 (VI層)、黄灰色粘土層 (VII層)、黒褐色粘土層 (VIII層)、黒灰色粘質土層 (IX層)、灰白色粘質砂層 (X層) などの層がほぼ水平に堆積し、淡灰色粘質砂層や淡黄色粘土層等 (IX層) に達する状況が確認された。このうち、V・VI・VII・VIII・IX層が遺物包含層であり、そして第X層上面が今回検出された遺構面となり、この面より遺構及び遺物が発見された。

I層 (第3層) 耕土層である暗灰色砂質土層で、現表土層となる。

II層 (第5層) 黄褐色砂質土層で、T1~

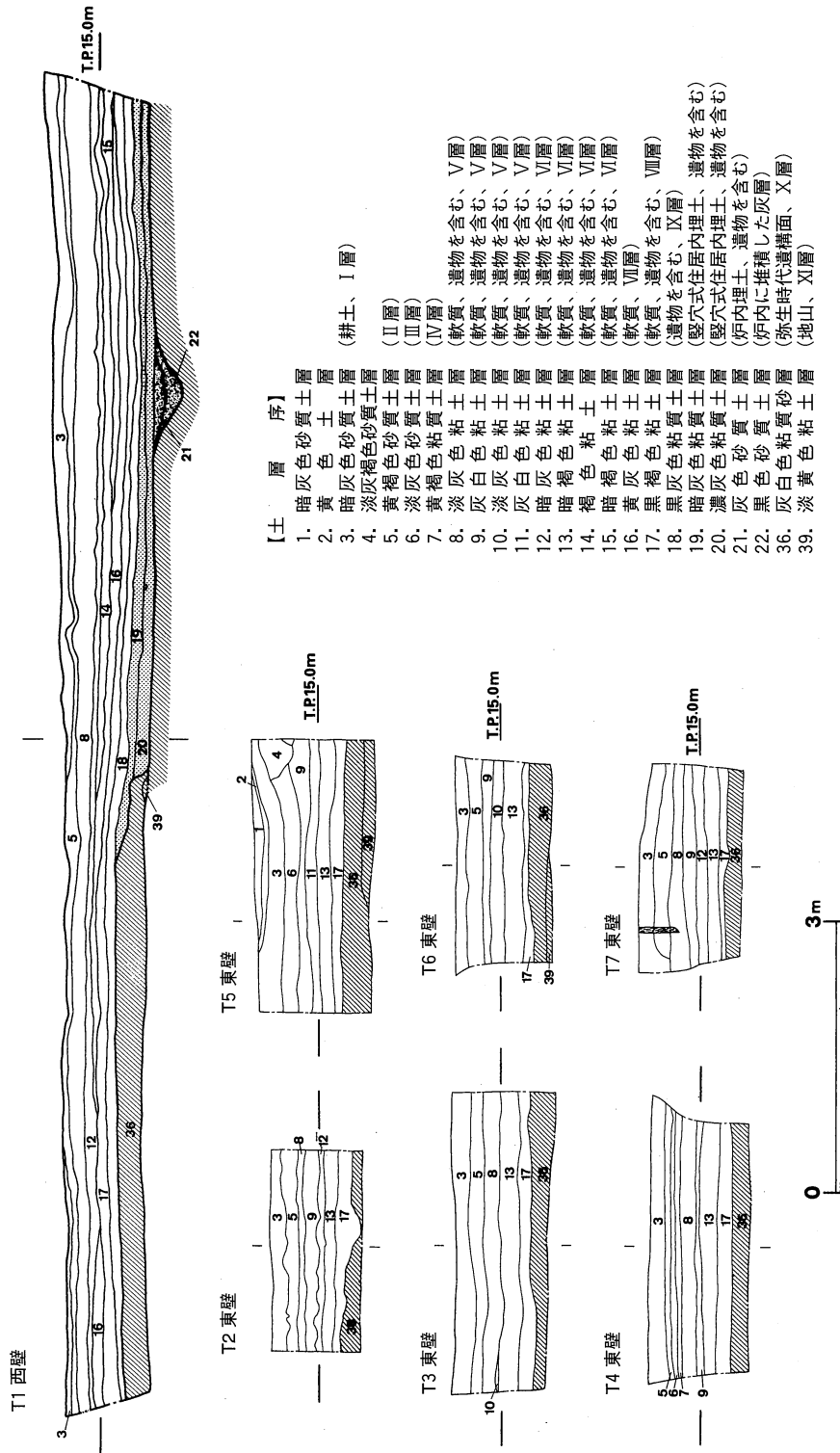


図4 第1次調査土層断面図

4・6・7に展開する。ほぼ水平に堆積し、厚さは約5～20 cmである。

Ⅲ層（第6層）淡灰色砂質土層で、T 5・6にみられる。ほぼ水平に堆積し、厚さは約4～20 cmである。

Ⅳ層（第7層）黄褐色粘質土層で、T 4にのみ確認されたほぼ水平に薄く堆積する層で、厚さは約4～9 cmである。

Ⅴ層（第8～11層）淡灰色・灰白色の淡色系の粘土層を主体とする堆積層で、他の層同様ほぼ水平に堆積する。これらの土層には中世の遺物が含まれていた。

Ⅵ層（第12～15層）暗灰色・暗褐色・褐色といった濃色系の粘土層を主体とする堆積層で、中世の遺物包含層である。

Ⅶ層（第16層）黄灰色粘土層で、今回の調査では竪穴式住居跡の上方においてのみ検出された。そのため、他の調査区ではこの層は確認されていない。厚さは最も厚いところで12 cmを測り、中世の遺物が出土した。

Ⅷ層（第17層）黒褐色粘土層で、すべての調査区において確認された。厚さは約5～18 cmで、弥生土器をはじめ、土師器・須恵器・中世の遺物が出土した。

Ⅸ層（第18層）黒灰色粘質土層で、T 1にのみ確認された。古墳時代の遺物包含層で、厚さは約4～14 cmを測り、土師器・須恵器が出土した。

この間、Ⅴ層～Ⅷ層においては、淡色系の粘土層と濃色系の粘土層が交互に堆積しており、殆どの層から遺物の出土をみた。

X層（第36層）灰白色粘質砂層で、総ての調査区においてほぼ水平に堆積していた。この層の上面は弥生時代の遺構面であり、竪穴式住居・溝・ピット土坑等が検出された。遺構面の標高はT.P.約14.8 mである。

XI層（第37～39層）淡灰色或いは淡黄色の淡色系の粘質砂又は粘土層を主体とする堆積層である。いわゆる地山とみられ、これらの層からは遺構・遺物とも検出されなかった。

(2) 遺 構

今回検出された遺構面はX層1面、遺物包含層は5層である。

まず、遺物包含層は、Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ層からは弥生土器、土師器、瓦器、須恵器等の遺物が出土し、Ⅸ層からは土師器、須恵器の破片が出土した。出土遺物からみて、おおよそ前者が中世、後者が古墳時代の所産と推定される。しかしながら、これらの層から遺構が検出されることはなかった。

次に、X層をベースとする遺構面からは、竪穴式住居跡1棟（T1 SB1）、南北方向の溝1条（T1 SD2）、土坑1基（T6 SK3）、ピット24基（T 1～4・6）が検出された。このうち、住居跡内からは周溝とみられる小溝など7条、柱穴と考えられるピット群、さらには住居跡中央付近からは炉跡と推定される炭化物を多く含んだ土坑が検出された。

また、これらの遺構からは弥生時代中期の所産と考えられる土器、石器が出土した。

SB 1 (第 5 図)

T 7 内北西側で検出された竪穴式住居である。調査区の形状から、住居全体を検出するには至らなかったが、そのうちの約 2 分の 1 を調査対象とした。南北方向の溝 (SD 2) や周辺のピット群と同様 X 層をベースとしており、その周溝や壁面の構造から最も外側の平面形状は円形と考えられる。直径は最大で約 8.4 cm (復元値) と考えられ、遺構面から住居内の床面までの壁の高さは約 24 ~ 37 cm 残存していた。

この住居内には、壁に沿って周溝と考えられる小溝が巡っていたが、これと同様な溝がほぼ同心円状に計 5 条 (小溝 1 ~ 5) と、これらと類似した小溝 2 条 (小溝 6・7) が検出された。幅 17 ~ 44 cm、深さ 8 ~ 12.5 cm を測り、灰色の粘土・粘質土層を埋土とする。周溝 1 は不明だが、周溝 2・3 は円形、周溝 4 は隅丸方形或いは多角形、周溝 5 は方形の配置に見える。このことから、住居跡は形状を変えつつ、その規模を拡大或いは位置を東西方向へ少しずつ移動させながら、数回におよぶ建て替えを行ったと考えられる。

床面は黄白色粘土層であり、その直上では最大 6 cm 厚の黄色粘土層 (28 層) 等の堆積がみられたが、建て替えの際に貼床もしくは補填が行われた可能性も考えられる。

また、住居内からはピット 20 基を検出した。これらのピットには、住居の周囲の壁に対して同心円状に設けられているものが多くあり、この住居の柱を据え付けるための柱穴と考えられる。

さらに、住居の中央付近とみられる床面には、炉跡とみられる土坑が設置されていた。長軸方向の直径は不明 (検出部分 92 cm) だが、短軸方向の直径 34 cm、深さ約 27 cm を測る楕円形で、上層には灰色砂質土層 (21 層)、下層には炭などの炭化物を多く含む黒灰色砂質土層 (22 層) が埋土となる。

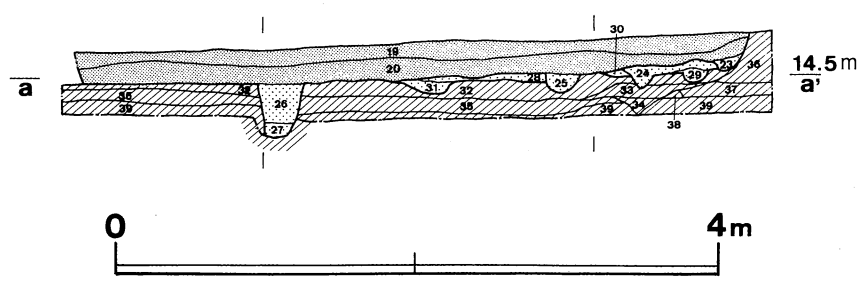
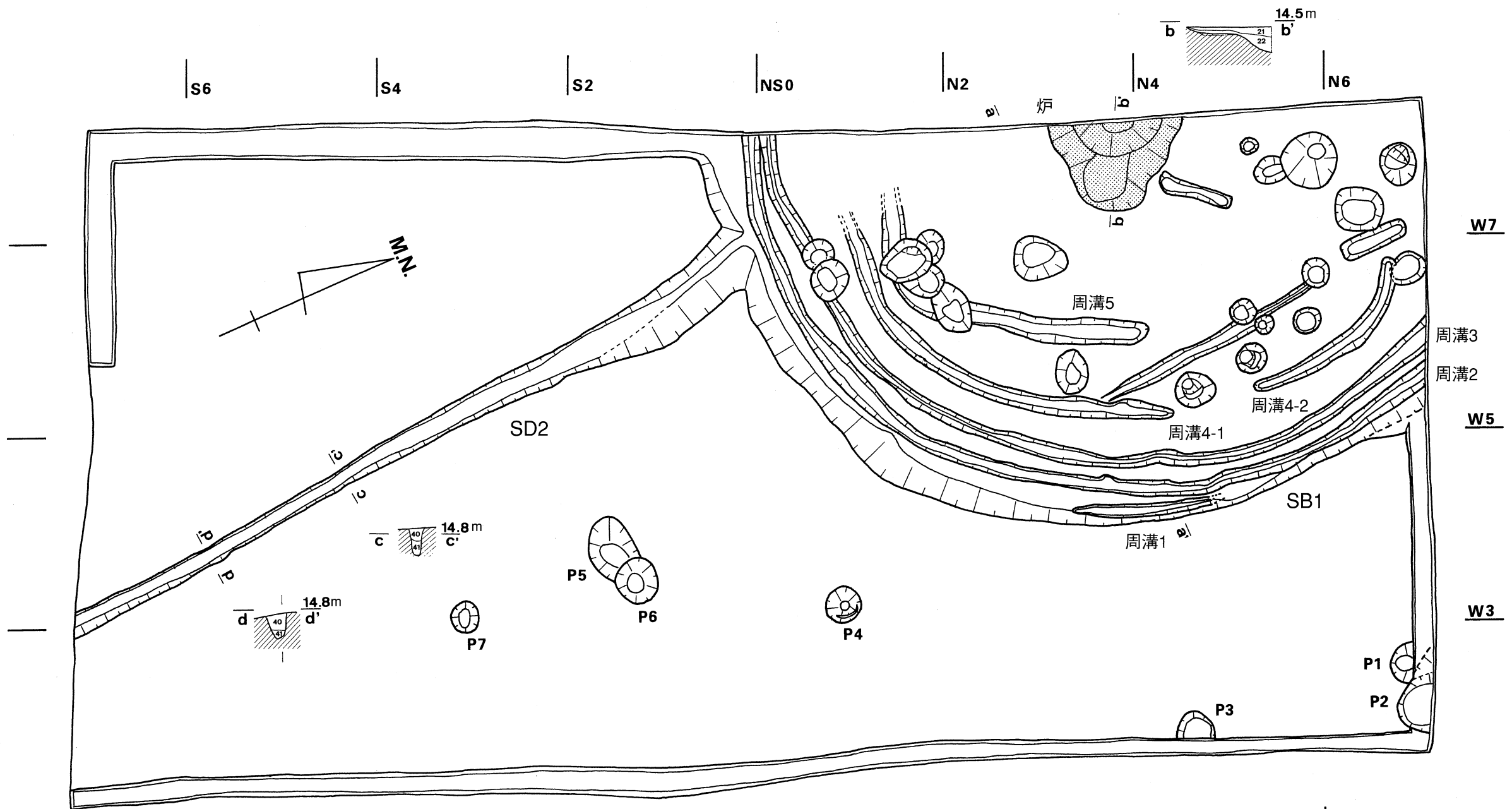
そして、住居内では、上層には暗灰色粘質土層 (19 層)、下層には濃灰色粘質土層 (20 層) が堆積していたが、これらの埋土からは、弥生土器の破片とともに石器及び剥片が多数出土した。

SD 2 (第 5 図)

竪穴式住居跡から南へ発し、T 1 をほぼ南北方向に縦断する、真っ直ぐな溝が検出された。幅 15 ~ 51.5 cm、深さ 23.7 ~ 29.9 cm を測り、方位は N 4° W を示す。断面形状は U 字形を示し、南北両端の比高差は殆ど認められなかった。埋土は、上層は灰色粘土層 (40 層)、下層は暗灰色粘土層 (41 層) とする。この溝からは、弥生土器や石庖丁等の石器が出土した。また竪穴式住居跡の埋土と連続しており、ほぼ同じ埋土であったことから、同時期に機能していたと想定される。

SK 3 (第 6 図)

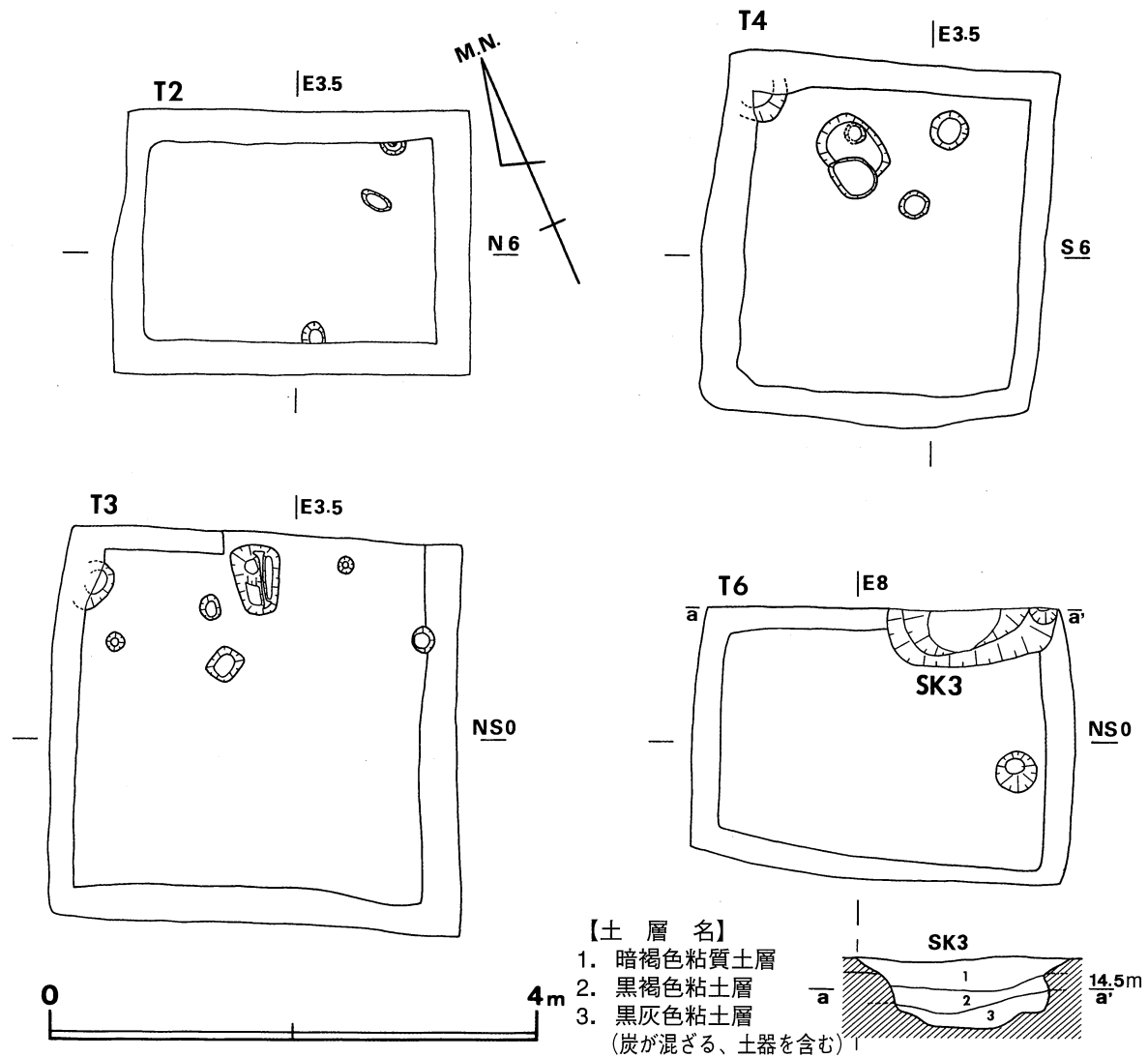
T 3 において 1 基の土坑が検出された。深さは 58.5 cm を測り、いずれも細片であるが弥生土器の出土がみられた。



【土層序】

- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| 19. 暗灰色粘質土層 (竪穴式住居内埋土、遺物を含む) | 31. 灰色粘土と黄色粘土の混合層 (柱穴内埋土) |
| 20. 濃灰色粘質土層 (竪穴式住居内埋土、遺物を含む) | 32. 黄白色粘土層 |
| 21. 灰色砂質土層 (炉内埋土、遺物を含む) | 33. 灰白色粘質砂層 |
| 22. 黒色砂質土層 (炉内に堆積した灰層) | 34. 紫灰色粗砂層 |
| 23. 淡黄灰色粘質土層 (竪穴式住居内周溝埋土) | 35. 明黄色粘土層 |
| 24. 淡灰色粘土層 (竪穴式住居内周溝埋土) | 36. 灰白色粘質砂層 (弥生時代遺構面、X層) |
| 25. 淡灰色粘土層 (竪穴式住居内周溝埋土) | 37. 淡灰色粘質砂層 (地山、XI層) |
| 26. 紫灰色細砂層 (柱穴内埋土) | 38. 黄色粘土層 (地山、XI層) |
| 27. 淡紫灰色細砂層 (柱穴内埋土) | 39. 淡黄色粘土層 (地山、XI層) |
| 28. 黄色粘土層 | 40. 灰色粘土層 (溝内埋土、土器を含む) |
| 29. 濃灰色粘土層 (柱穴内埋土) | 41. 暗灰色粘土層 (溝内埋土、土器を含む) |
| 30. 灰色粘質土層 | |

第5図 第1次調査遺構平面図(1)



第6図 第1次調査遺構平面図(2)

ピット1～24 (第5・6図)

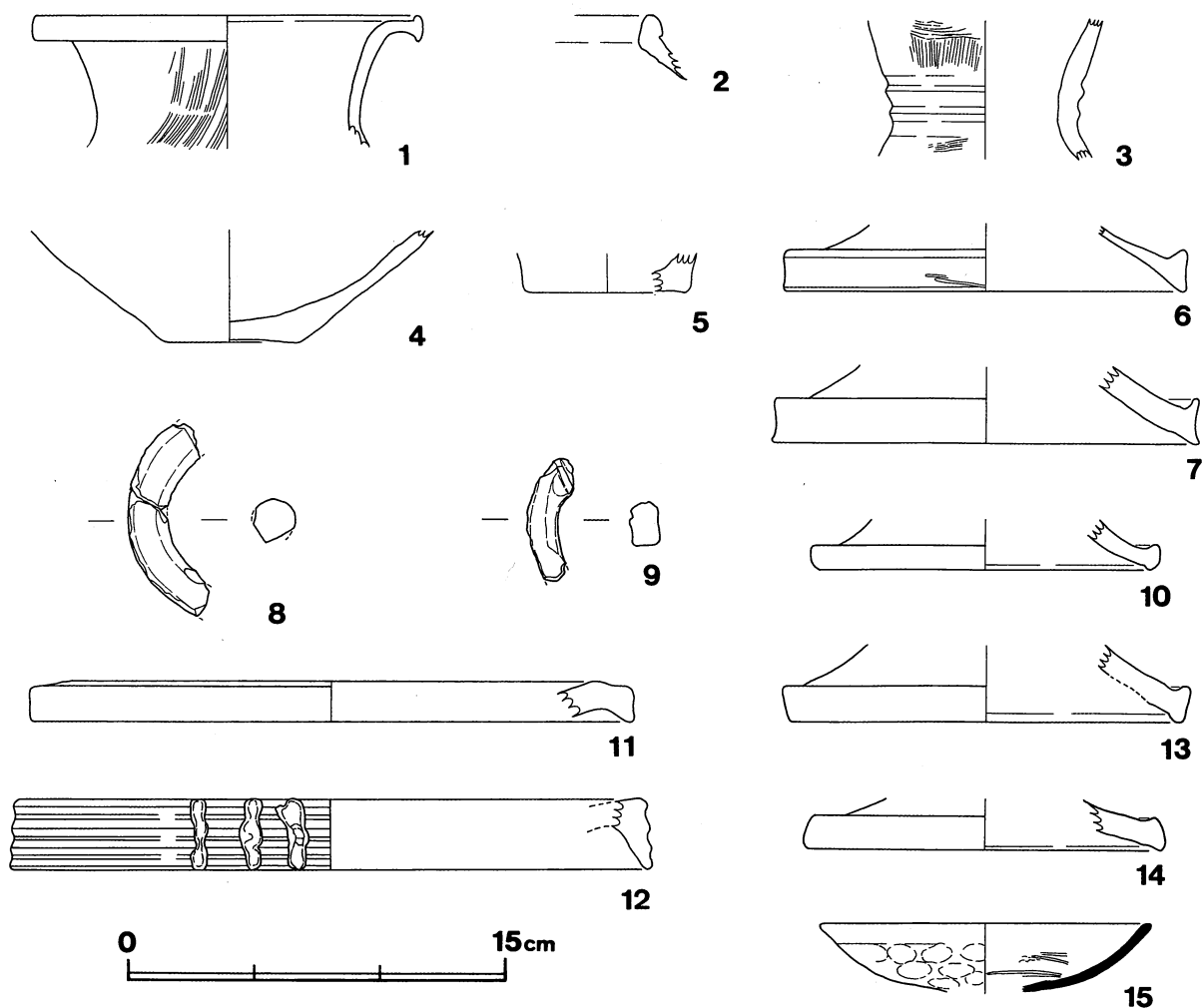
竪穴式住居外では、24基を数えるピットが、T5・T7を除く全ての調査区において検出された。平面形状は円形のものが多く、他に隅丸方形、不定形のものなどが確認された。一辺の長さ又は直径は約13～63.5cm、深さは約2.5～28.5cmを測る。調査区の形状・配置により、明確ではないが掘立柱構造の建物があった可能性も考えられる。

(3) 出土遺物

今回の調査では、収納箱2箱分の遺物が出土した。

a. 土器

今回の調査では、竪穴式住居跡・溝などの遺構内からは広口・無頸等壺、甕、高杯等の弥生土器が出土し、また包含層からは弥生土器の他、土師器、須恵器鉢、土師器皿、瓦器椀、白磁椀などの



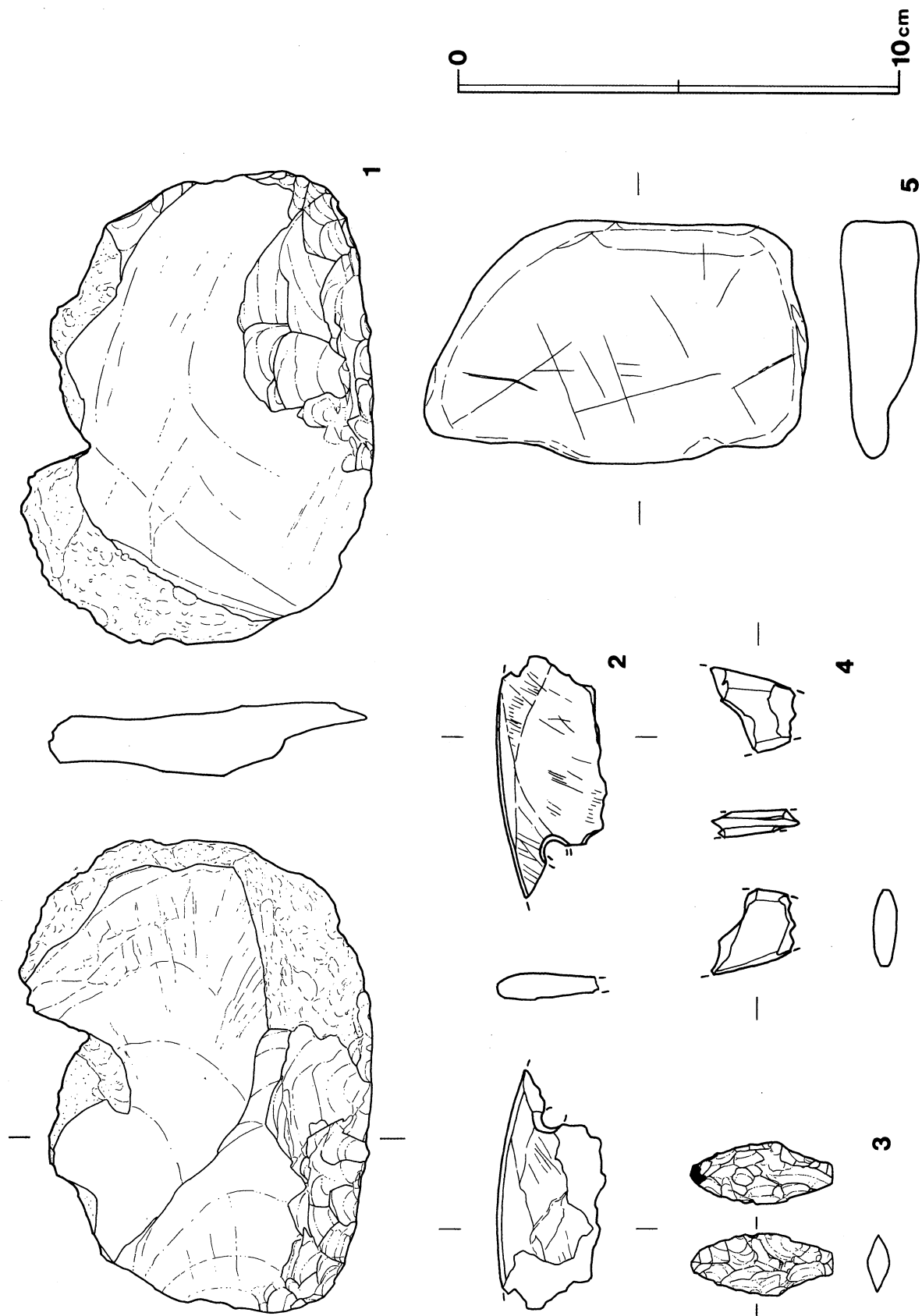
第7図 第1次調査遺物実測図(1)

破片が出土した。

このうち、弥生土器は、主に竪穴式住居内の埋土である暗灰色粘質土層及び濃灰色粘質土層、溝内埋土である濃灰色・灰色粘土層等からの出土が最も多く認められた。これら遺構からの出土遺物は壺・高杯等が顕著で、特に壺では斜格子文・突帯文・凹線文などの文様を施すものがみられたが、いずれも摩滅の著しい細片であったため、図化できたものは(1)～(15)までの15点であった(第7図)。

弥生土器(1)～(8)はSB1内埋土、(9)・(10)はSD2内埋土、(11)はT1P5内、(12)～(14)はⅧ層からの出土である。

壺は、口縁部を丸く収め直下に櫛描直線文を施す無頸壺(2)などもみられたが、主に広口壺(1)・(11)・(12)であり、口縁端部側面に凹線および棒状浮文を配する(12)など口縁部にいろいろな形態がみられた。また、(3)ではつまみ上げたような断面三角形の突帯文2条、その上下に櫛描直線文を配する頸部がみられた。(6)・(7)・(10)・(13)・(14)は、高杯もしくは台付鉢



第8図 第1次調査遺物実測図(2)

の裾部と考えられるが、いずれも摩滅が著しく調整等が明確ではないため、壺口縁部が含まれている可能性も考えられる。この他、底部が2点(4)・(5)、把手が2点(8)・(9)みられた。

瓦器碗(15)は、T1攪乱土層より出土したもので、中世遺物としては唯一実測できたものである。法量は残存高2.7 cm、口径12.8 cm(復元値)を測る。

これら時期については、摩滅の著しい細片であったため不明確な点も多いが、突帯文を施す頸部(3)などから中期後半(IV様式)の資料と考えられる。

b. 石 器

今回の調査で出土した石器は、打製石庖丁1点(1)、磨製石庖丁1点(2)、打製石鏃1点(3)、磨製石製品1点(4)、砥石1点(5)、剥片23点である(第8図(1)～(5))。その殆どが弥生時代と考えられる遺構内の埋土からの出土であり、特に剥片については、IX層等から出土した数点を除き、その殆どが住居内からの出土である。

(1)は打製石庖丁の可能性が考えられるもので、SB1内埋土暗灰色粘質土層より出土した。石材はサヌカイトで、隅丸長方形の長辺側の一方には刃とみられる調整が両面に施されていた。法量は長さ10.5 cm、幅8.0 cm、厚さ1.3 cm、重さ151.68 gを測る。

(2)は磨製石庖丁と考えられる細片である。SD2内埋土暗灰色粘質土層のほぼ底面より出土した。背の部分とみられ、紐孔1ヶ所が確認された。石材は粘板岩で、現存する部分の法量は長さ5.5 cm、幅2.5 cm、厚さ0.8 cm、重さ9.77 gを測る。

(3)は打製の凸基有茎石鏃で、SB1内埋土暗灰色粘質土層より出土した。石材はサヌカイトで、法量は長さ3.25 cm、幅1.45 cm、厚さ0.55 cm、重さ1.98 gを測る。

(4)は磨製石器の細片である。器種は不明であるが、遺存部分の形状から石鏃と考えられる。SB1内埋土暗灰色粘質土層より出土した。石材は頁岩で、著しく風化していた。現存する部分の法量は長さ1.9 cm、幅1.95 cm、厚さ0.55 cm、重さ2.22 gを測る。

(5)は砥石として使用したと考えられる石で、SB1内埋土暗灰色粘質土層より出土した。石材は砂岩で、法量は長さ8.65 cm、幅5.5 cm、厚さ1.85 cmを測る。

3. まとめ

今回の調査では、弥生・古墳時代、そして中世と数時期にまたがる遺物の出土がみられた。このうち、古墳時代、中世に関しては遺構は検出されず、包含層を検出したにすぎない。また、ここより出土した遺物はいずれも細片であり、数量からみても若干数に止まった。しかしながら、西方すぐの地点には七尾瓦窯跡がありながら、これと同時期あるいは関連の遺構・遺物が全くみられなかったのに比べると、近隣調査においても中世の遺物は出土しており、付近に未周知の古墳時代や中世の遺跡が展開している可能性が想定される。

次に、遺構面では、竪穴式住居(SB1)、溝(SD2)、土坑(SK3)、ピット群が検出された。ピット

群については、調査区の配置・形状から明らかにできなかったが、竪穴式住居については、周溝、周壁、柱穴、炉跡など、良好な状態で検出された。弥生時代の竪穴式住居では、明確なものとしては吹田市内において2例目となる。今回、住居内からは約5条の周溝が検出され、最低5回の建て替えがあったことを推測させる。周壁は円形であったが、周溝の平面形状から円形の他に、方形などの形状を経ていた可能性が考えられる。また、周溝とその付近の土層の堆積状況から、周溝2・5→周溝3・4→周溝1の順が想定され、西から東へと一定の方向性をもって建て替えられたのではなかったと思われる。さらに、住居の周囲では、ピットおよび周堤などの遺構は検出されなかった。今回出土した遺構面は、洪積層によって構成される千里丘陵から流出した二次堆積層上にあると考えられ、丘陵部を除くと他よりも比較的高所に位置することから、当時の地表面はすでに流失あるいは削平されて失われたと考えられる。そのため、周堤等の存否は不明だが、周囲の壁面については本来の高さを残してはいないと考えられる。上記の遺構については、弥生土器および石器が含まれており、特に土器の特徴から弥生時代中期後半（IV様式）の所産と考えられる。また、今回住居内からは16点に及ぶサヌカイト剥片が出土した他、遺構面および包含層からも数点の出土が確認された。おそらくは、住居内およびその周辺において石器の製造を行っていたと考えられる。

竪穴式住居（SB 1）と連結する溝（SD 2）であるが、埋土・出土遺物等からほぼ同時期に機能していたと考えられる。吹田市内における竪穴式住居の明確な検出例は、本遺跡の他には垂水遺跡があるが、この遺跡においては同様な溝は確認されなかった。本遺跡の住居については、溝底部および住居床面の比高差や排出先の問題はあるが、近隣市においては、高槻市では古曾部・芝谷遺跡、枚方では藤阪東遺跡、長尾谷町遺跡、星丘西遺跡、村野遺跡、村野南遺跡、藤田土井山遺跡などに、他には京都市大藪遺跡、鳥取県妻木晩田遺跡などに、竪穴式住居跡と連結する溝が見つかっており、これらと同様な機能を有していたと考えられる。

最後に、七尾東遺跡では、調査区の形状のため、他に何棟あるのか、集落と呼ぶことができる規模なのか、また遺構面に広範に展開するピット群が建物跡であるのか不明な部分も多く、課題も大きいところであるが、岸部地域においては初例であり、同地における弥生時代の生活域の一端が明らかとなったことは意義深いと考えられる。

《参考文献》

- | | | |
|--|------------------------------|----------|
| 金関 恕・佐原 真編「弥生時代の研究 5 道具と技術 I」 | 雄山閣出版社 | 1985年10月 |
| 「垂水遺跡第1次発掘調査概報」 | 吹田市史編さん室・関西大学考古学研究室 | 1975年3月 |
| 寺沢 薫・森岡秀人編「弥生土器の様式と編年 近畿編 II」 | 木耳社 | 1990年11月 |
| 「古曾部・芝谷遺跡 一高地性集落遺跡の調査一」 | 高槻市教育委員会 | 1996年11月 |
| 「藤阪東遺跡発掘調査概要報告」 | (財)枚方市文化財研究調査会 | 1990年3月 |
| 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要2000」 | 枚方市教育委員会 | 2001年3月 |
| 「枚方市文化財年報16（1994年度分）」 | (財)枚方市文化財研究調査会 | 1996年3月 |
| 「枚方市文化財年報20（1998年度分）」 | (財)枚方市文化財研究調査会 | 1999年9月 |
| 「枚方市文化財年報21（1999年度分）」 | (財)枚方市文化財研究調査会 | 2000年7月 |
| 「枚方市文化財年報22（2000年度分）」 | (財)枚方市文化財研究調査会 | 2001年11月 |
| 「つちの中の京都 2」 | (財)京都市埋蔵文化財研究所 | 2001年11月 |
| 「妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅲ〈妻木新山・仙谷地区〉一大山スイス村リゾート開発事業に伴う発掘調査報告Ⅲ一」 | 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県大山町教育委員会 | 2000年3月 |

第3章 第2次・第3次調査

1. 調査の経過

今回の発掘調査は、当初、七尾東遺跡の周辺地であった当調査地（吹田市山田南 1124 - 5 他）において共同住宅の建設が計画され、平成 5 年 6 月 22 日に試掘調査を行ったところ、中世の遺物包含層が確認され、当地にまで七尾東遺跡の範囲が広がっていることが新たに判明した。この結果により、予定の建築工事が実施された場合、部分的に遺跡が破壊されることが明らかとなり、工事によって遺跡の破壊が考えられる建物基礎部分について発掘調査を実施した（第 2 次調査）。調査は、平成 5 年 9 月 20 日から 10 月 6 日にかけて、10 か所の調査トレンチ（T 1～T 10：62 m²）を設けて行った。そして、この調査においては、中世遺物包含層だけでなく、弥生時代の遺構・遺物をも検出する成果を得て、一応は調査を終了した。しかし、その後、予定工事の中で擁壁設置部分においても一部遺跡を壊す恐れのあることが判明し、改めて発掘調査によって記録作業を行う必要が生じた。これにより、擁壁部分を対象に調査トレンチを 1 か所（T 11：110 m²）設けて、平成 6 年 5 月 26 日から 6 月 17 日にかけて調査を実施した（第 3 次調査）。

本章は、この 2 件の発掘調査の成果をまとめたものである。そして、ここでは特にこれらを区分せず一括して報告する。ただし、第 2 次調査と第 3 次調査との間においては、調査トレンチの大きさや天候等の影響によって、遺構の検出状況や土層観察などに若干の差異が生じてしまった。本報告をまとめるにあたっては、できる限りこれらを整合させたが、土層図・遺構図の一部には若干のずれが残った。この点はあらかじめ断っておく。

2. 調査の成果

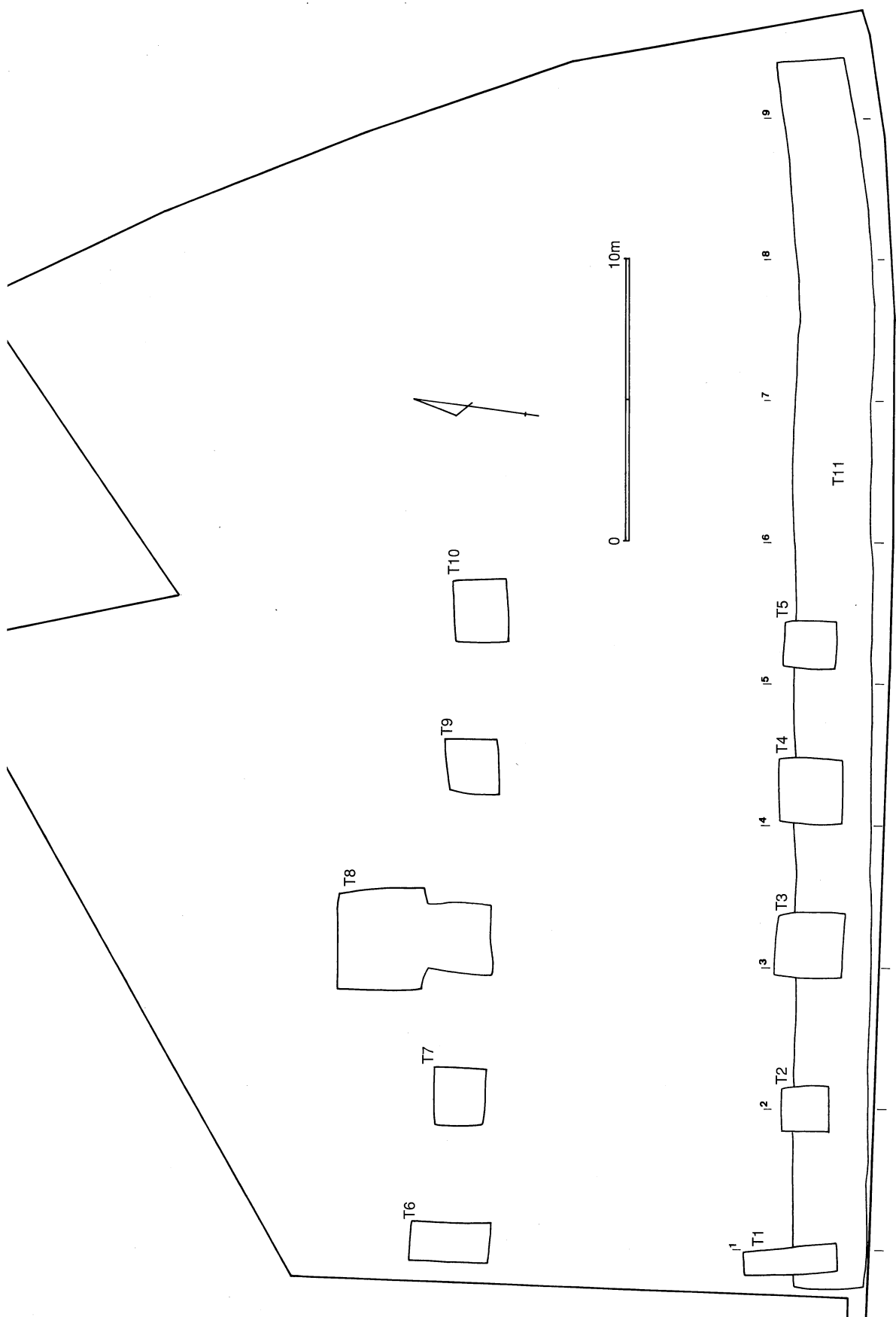
a. 土層序

調査区内の土層序は、旧耕土層（第 1 層）以下、中世の遺物包含層である暗灰色粘土層（第 3 層）、そして弥生時代の遺物包含層である暗褐色粘土～砂質土層（第 5～7 層）の堆積が広く認められた。そして、弥生時代遺物包含層下においては、主に黄灰色系の砂質土層・粘質土層（第 8～17 層）が認められ、これらをベース面として遺構が検出された。

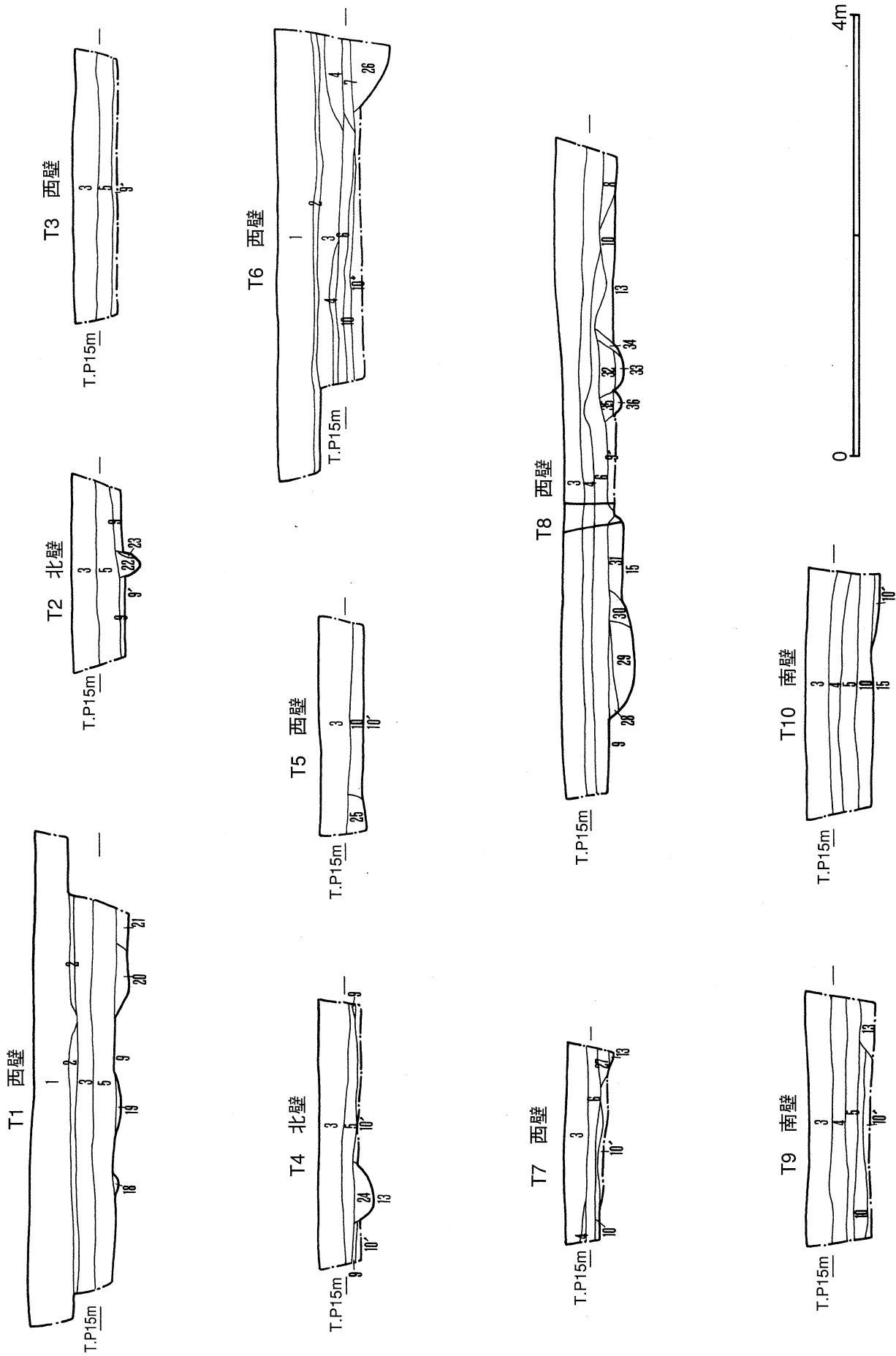
弥生時代の遺構ベース面となる第 8～17 層については、やや軟弱な土層であり、現在、調査地の南側を東流する正雀川が、かつて千里丘陵の谷あいを流れる中で、土砂を運び形成したものであると考えられる。そして、調査地の東側と北側では、これら土層はより砂質気味となり、北側において特に砂気を多く含んでいた。

b. 遺構

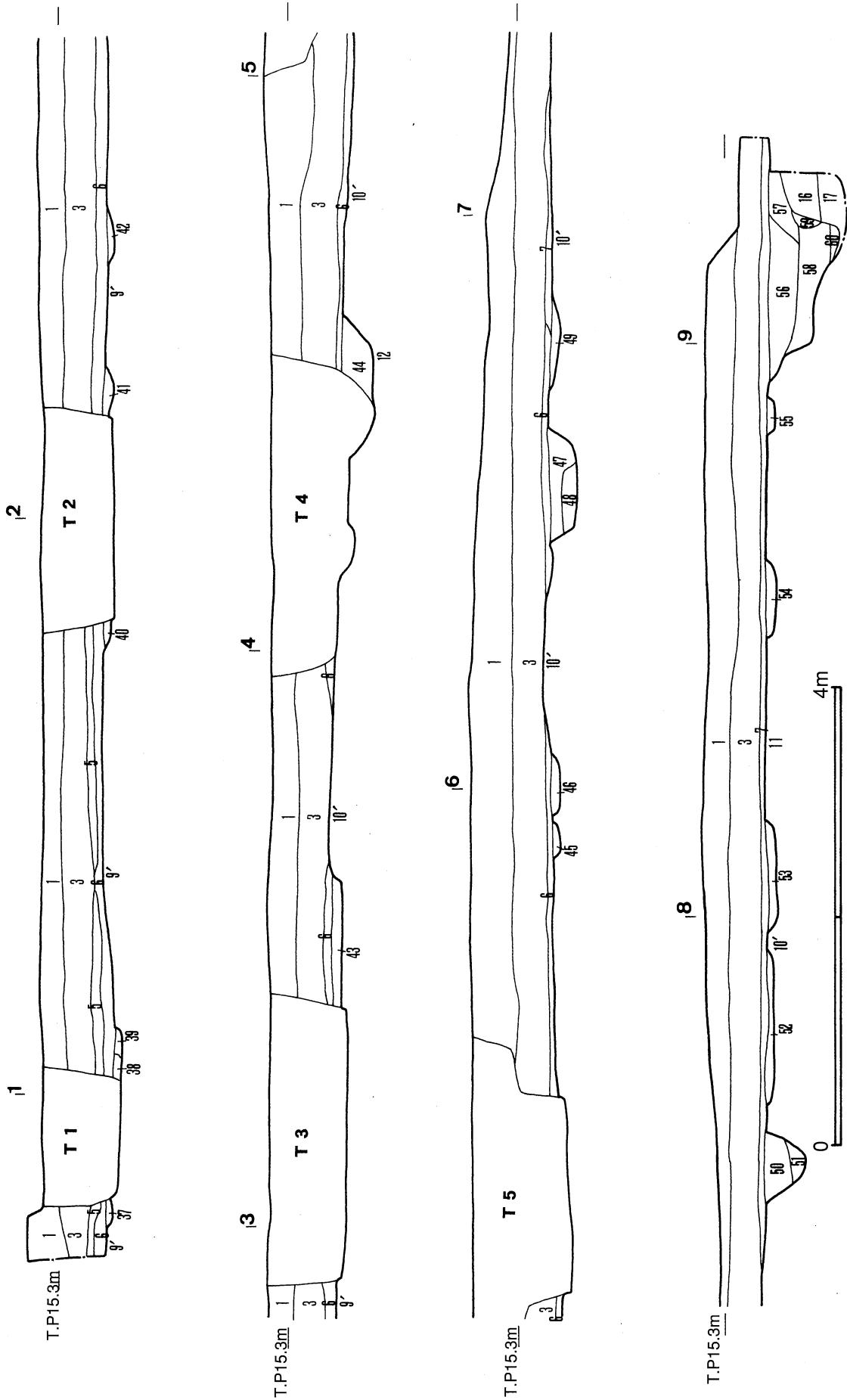
今回、中世と弥生時代の遺物包含層が確認されたが、遺構については弥生時代遺物包含層下において検出され、中世遺物包含層に関連しては遺構を認めることはできなかった。



第9图 第2・3次調査区平面图



第10図 第2・3次調査土層断面図 (T.1~T.10)



第11図 第2・3次調査土層断面図 (T11 北壁)

(土層名一覧)

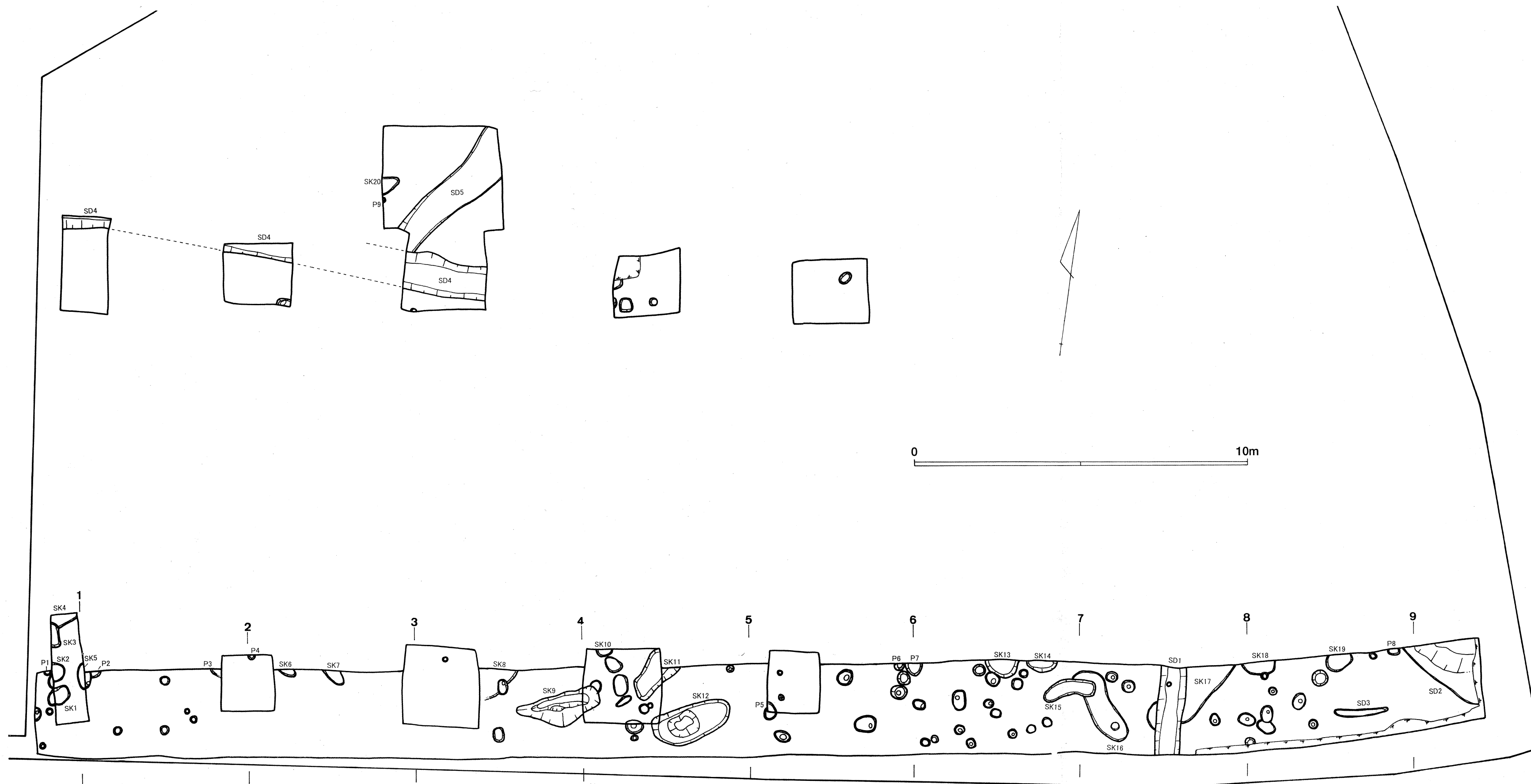
- | | | |
|----------------------|---------------------------|-------------------------|
| 1. 旧耕土 | 19. 暗褐色粘土(やや淡) [SK2] | 40. 暗黄褐色砂質土 [P3] |
| 2. 暗黄白色粘土 | 20. 暗褐色粘土(より暗) [SK3] | 41. 暗褐色粘質土 [SK6] |
| 3. 暗灰色粘土 [中世遺物包含層] | 21. 暗褐色粘土(暗灰色混じる) [SK4] | 42. 暗褐色粘質土 [SK7] |
| 4. 暗灰色粘土(褐色がかる) | 22. 暗褐色粘土(暗灰色混じる)] [P4] | 43. 暗黄褐色粘質土 [SK8] |
| 5. 暗褐色粘土 | 23. 黄灰色粘土(暗灰色混じる)] [P4] | 44. 暗黄褐色砂質土 [SK11] |
| 6. 暗褐色粘質土 | 24. 暗褐色粘土(灰色混じる) [SK10] | 45. 黄褐色砂質土 [P6] |
| 7. 暗褐色砂質土 | 25. 暗黄褐色砂質土(より暗) [P5] | 46. 黄褐色砂質土 [P7] |
| 8. 黄灰色粘土 | 26. 暗灰褐色砂 | 47. 暗黄褐色粘質土 |
| 9. 暗黄褐色粘質土 | 27. 暗灰褐色砂 | 48. 暗黄褐色砂質土] [SK13] |
| 9. 暗黄灰色粘質土 | 28. 暗灰褐色砂質土 | 49. 黄褐色砂質土 [SK14] |
| 10. 暗黄褐色砂質土 | 29. 暗黄灰色砂(褐色混じる) | 50. 暗褐色粘土 |
| 10. 暗黄灰色砂質土 | 30. 暗黄色砂(褐色混じる) | 51. 暗褐色砂質土(やや粗)] [SD1] |
| 10. 暗黄灰色砂質土(粗砂混じる) | 31. 暗灰褐色砂(やや淡) [SD5] | 52. 黄褐色砂質土 [SK17] |
| 11. 黄灰色砂質土(褐色混じる) | 32. 暗褐色粘土(やや淡) | 53. 黄褐色砂質土 [SK18] |
| 12. 淡青灰色砂質土(粗い) | 33. 暗褐色粘土(灰色混じる)] [SK20] | 54. 淡黄褐色砂質土 [SK19] |
| 13. 淡黄灰色砂 | 34. 暗黄褐色粘土(灰色混じる) | 55. 暗褐色砂質土 [P8] |
| 14. 黄灰色砂 | 35. 暗褐色粘土(やや淡) | 56. 暗褐色砂質土 |
| 15. 暗黄色砂 | 36. 暗黄灰色砂質土(褐色混じる)] [P9] | 57. 暗黄褐色砂質土 |
| 16. 黄灰色砂質土 | 37. 黄褐色砂質土(やや粘質) [P1] | 58. 暗褐色砂質土(やや粘質) |
| 17. 黄灰色粘質土 | 38. 黄褐色砂質土(やや粘質) [SK5] | 59. 黄灰色砂質土(やや暗、粘質) |
| 18. 暗褐色粘土(やや淡) [SK1] | 39. 淡黄褐色砂質土(やや粘質) [P2] | 60. 暗灰色砂質土 |

検出遺構には、ピット、土坑、溝などがあつた。調査範囲の限りもあつてか、第1次調査で検出されたような建物跡については確認されなかったが、ピットの中には柱痕の認められるものが多いあつた。ここで主だった遺構についてみておく。

[土坑]

土坑で特徴的であつたのが、T 4 および T 11 中央付近で検出されたやや細長い形状を呈する土坑 (SK 9・SK 11・SK 12) である。SK 9 は、長さ約 2.5 m、幅約 1 m、深さ約 40 cm を測り、方位は N 70° E を示し、緩い段を有しつつ、断面形が V 字を呈するように掘り込まれていた。SK 12 は、長さ約 2.4 m、幅約 1.1 m、深さ約 30 cm を測り、方位は N 60° E を示し、その西側で一段深く掘り込まれていた。また SK 11 は、検出部分で長さ約 1.2 m、幅約 80 cm、深さ約 30 cm を測り、方位は N 40° E を示し、やや平坦な底面を有していた。これらは、ともにその長軸が北東・南西方向を示しており、SK 9 と SK 12 については、その長さ・幅ともほぼ同じ規模となる。この検出状況からみて、SK 11 も含めてこれら 3 基の土坑は、何らかの意図をもって掘削されたことにより、その規模や方位に類似点が生じた可能性が考えられる。そして、その意図としては、墓坑という可能性が考えられる。しかし、土坑の底面形にはばらつきがあり、出土遺物が土器細片のみで、墓坑と断定するには少し検討を要する点がある。また、形状から粘土採掘坑としての可能性もあるが、これら土坑は粘質土～砂質土の地盤上に掘り込まれており、精良な粘土を得ることを目的とするならば、その可能性は低いと考えられる。

なお、T 11 西側においても、やや細長い形状をもつ土坑が検出された (SK 15～17)。しかし、これらの土坑については、その深さが SK 15 で約 12 cm、SK 16 で約 3 cm、SK 17 で約 7 cm と浅く、先の SK 9・11・12 とはまた別の形成要因が考えられる。しかし、その性格については不明である。

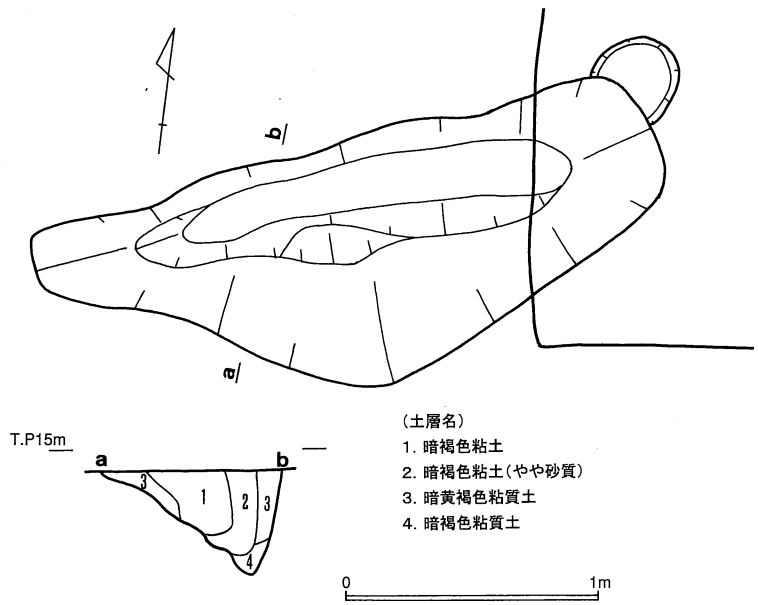


第12図 第2・3次調査遺構平面図

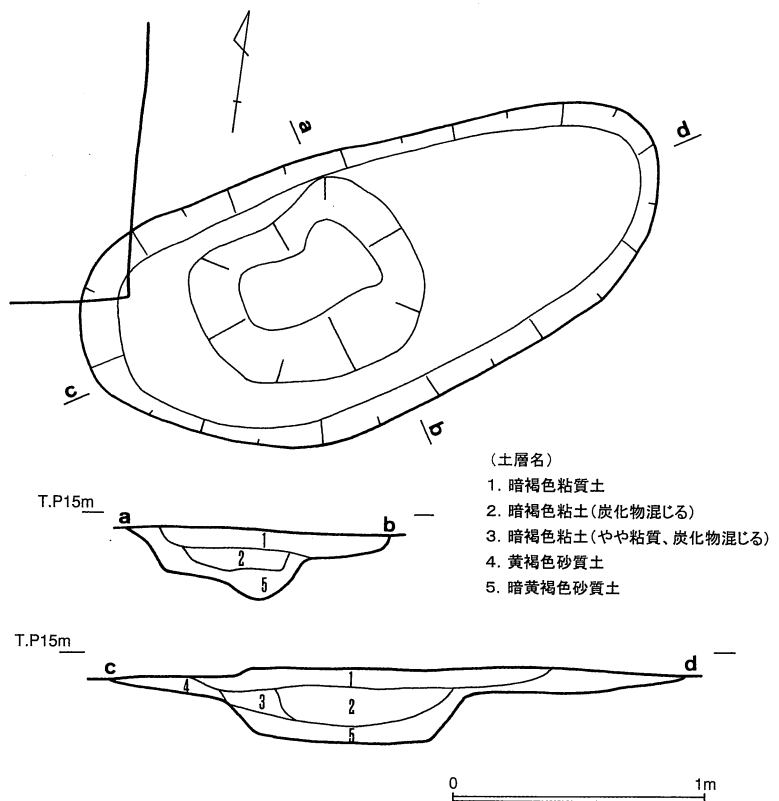
[溝]

T 11において3条の溝が検出された。SD 1は、幅約80 cm、深さ34 cmを測り、方位はN 3° Wを示していた。SD 3については、長さ約1.5 m、幅約20 cm、深さ約5 cmを測り、方位はN 80° Eを示し、SD 1にほぼ直交する方位でのびていた。SD 2については、当初、大型の土坑か落ち込み地形かと思われたが、掘削を行ったところ、遺構南西側の肩部ラインと平行するような形で上がり肩がその北東隅で認められた。このことから、おそらく大型の溝であろうと考えられる。その方位はN 60° Wを示し、深さは約60 cmを測った。

SD 4は、T 6～8にかけて検出することができた。T 8においては、幅約1～1.2 m、深さ約30 cmを測り、方位はN 84° Wを示していた。また、T 8ではSD 4に切られる形でSD 5が検出された。SD 5は、幅0.8～1.2 m、深さ約15 cmを測り、方位はN 43° Eを示していた。この2条の溝においては、砂が堆積土として認められ、おそらく流路跡であろうと考えられる。なお、SD 5内からは、まとまった形で縄文時代晩期の土器片を検出することができた。



第13図 第2・3次調査SK 9実測図



第14図 第2・3次調査SK 12実測図

c. 遺物

今回の出土した遺物については破片が多く、図化できるものは少なかった。特に弥生時代の遺物については細片でほとんど図化できなかった。ここでは、図化し得たものについてまとめておく。

[暗灰色粘土層（第3層）出土遺物：1～22]

ここからは、中世の遺物を中心に、古墳時代・平安時代末の遺物も検出された。1～6は土師器皿である。1～3はての字状口縁皿であるが、器壁がやや厚く、口縁部の外反の程度も弱く、ての字状口縁皿の中でも新しい時期の段階のものである。

7～12は須恵器片口鉢の口縁部分である。その全体形はわからないが、その口縁端部は上方へと拡張されており、10～12についてはその程度がより強くなっている。

13～15は瓦器椀である。13と15については、残存部分で、その内面にヘラミガキが施されているが、外面には認められない。また13の外面上半についてはヨコナデ、その下半は指オサエが施されている。14については摩滅が著しく、調整が不明であるが、その口縁端部内面に沈線がめぐる。

16は白磁椀である。やや丸みをもった体部から口縁部が屈曲気味に外方へのび、口端部はやや鋭くのびる。

17～19は須恵器蓋杯である。19は杯身か蓋かは特定できないが、残存部分で十字形のヘラ記号が認められる。

20はやや偏平な球形の土製品である。径約1.5 cmを測る。その用途は不明である。21は管状土錘である。

22は弥生土器壺の口縁部である。垂下する口縁端部に3条の凹線がめぐる。

[暗褐色粘土層（第5層）出土遺物：23]

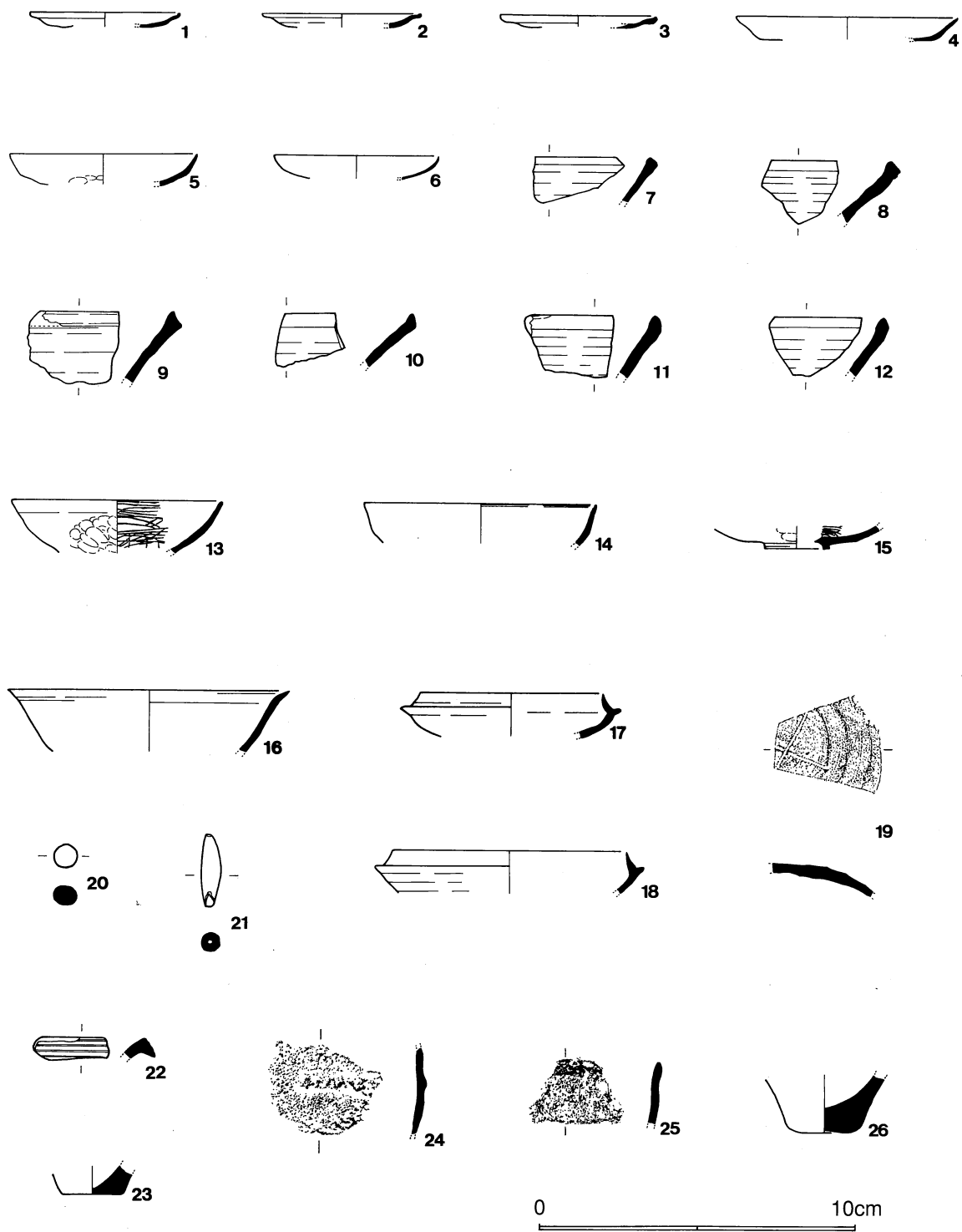
第5層は弥生時代遺物包含層であるが、遺物は細片ばかりで、図化できたのはこの23のみであった。摩滅が著しく調整は不明であるが、甕か壺の底部である。

[SD 5 出土遺物：24]

SD 5においては、まとまった形で縄文時代晩期の鉢とみられる土器片が検出された。しかし、これらは遺存状態が悪く、それは取り上げるとともに崩れていく状況であった。24は、その中でも状態の良いもので、刻目突帯のつく鉢の体部部分にあたる。

[暗黄灰色砂質土層（第10'層）出土遺物：25・26]

T 8において遺構のベース層となった第10'層内にて2点の土器片が検出された。25は刻目突帯とみられる突帯がつくもので、縄文時代晩期の鉢であると考えられる。突帯がつく部分の摩耗が激



第15図 第2・3次調査遺物実測図

しく、この部分が口縁部にあたるのか、それとも体部にあたるのかは明確でない。

26は、平底の土器底部であるが、この部分だけではその器種や時期が明確でない。しかし、焼成具合があまく、砂粒を多く含む胎土をみると、25とよく似ており、同じ土層の出土ということからして、これも縄文時代晩期の鉢の破片とみられる。

3. まとめ

以上述べてきたように、今回の発掘調査では、中世期を中心とする遺物、弥生時代の遺構・遺物、そして縄文時代晩期の遺物をも検出することができた。

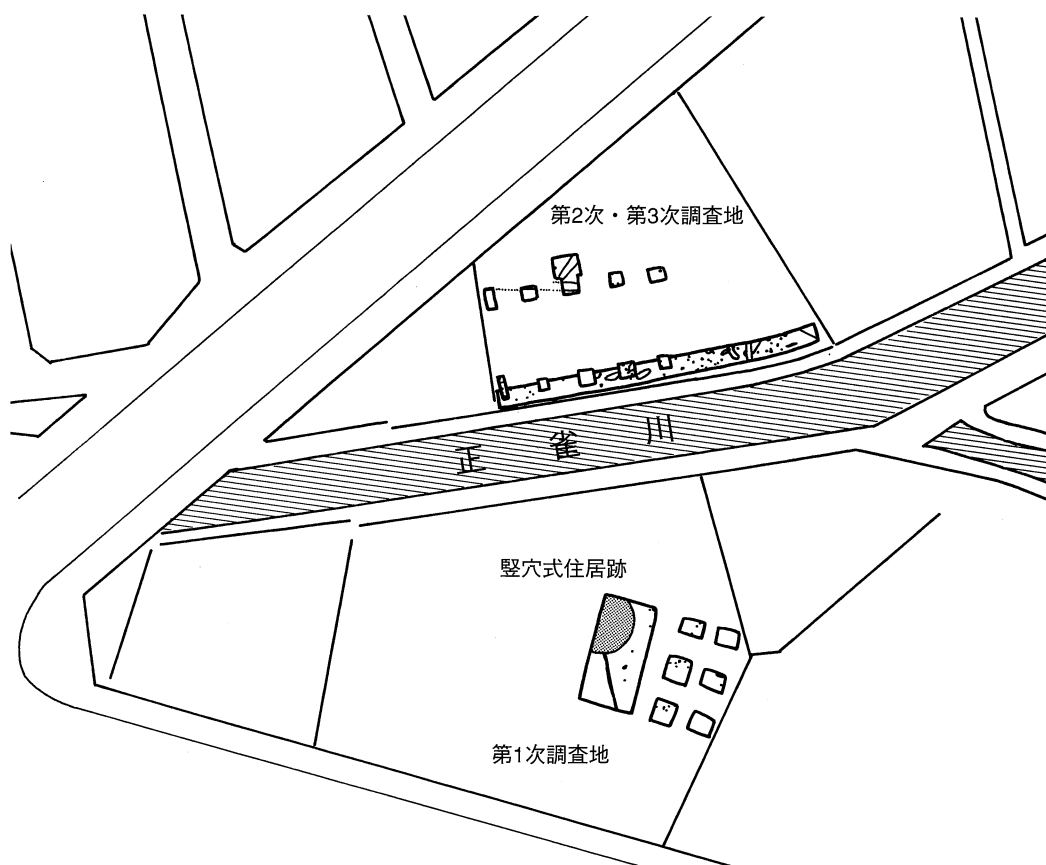
中世遺物包含層内の遺物については、破片で摩滅したものが多く、また古墳時代・平安時代のもも少量含んでいた。そして、これにともなう遺構は検出されなかった。このことから、この包含層は、おそらく中世における耕地開発等によって近隣から土砂がもたらされた結果、二次的に堆積したものであらうと考えられる。

また、弥生時代の遺物についても、摩滅した細片が多く、時期を特定するには難しい面もあるが、当調査地南側で実施した第1次調査の結果を踏まえれば、ここで検出された遺構・遺物については、おおむね弥生時代中期のものであらうと考えられる。ただし、遺構には、SK 9やSK 11、SK 12、SD 2などにみられる北東・南西軸（北西・南東軸）に方位をもつものと、SD 1やSD 3、SD 4のように、南・北軸（東・西軸）に方位をもつものが認められることから、遺構の時期として2期以上に細分される可能性もある。

さて、遺構についてももう少し述べると、ここでは建物跡に復元できるピットの並びや竪穴等は確認できなかったが、柱痕をもつピットが多数検出された。このことから、当調査地内においても建物跡が存在する可能性は高いと考えられる。そして、今回の遺構の検出状況を概観すると、T 11東半において柱穴とみられるピットが多数検出されたが、SK 9・SK 11・SK 12付近を境にその西側では少なかった。また、調査地北側に設けたT 6～10においては、遺構ベース層に砂気が多く含むようになり、相対的に軟弱な地盤上に遺構が展開していた。このように、限られた範囲の中での観察ではあるが、当調査地内においては、遺構の展開に何らかの空間的傾向が認められる。これについては、今後の調査の進展によって明らかにされるであろうが、いずれは、居住域や耕作地、または墓域などという空間構成をもった弥生集落の姿がみえてくるかもしれない。

ところで、T 8において認められたSD 5からは、まとまった形で縄文時代晩期の土器片が検出された。SD 5からは、明らかにこれより時代の下る遺物は検出されなかった。そして、T 8においては、このSD 5のベース層となる暗黄灰色砂質土層（第10'層）からも突帯文のつく土器片（25）が1点認められ、同じく第10'層から出土した土器底部片（26）も、その胎土からおそらく縄文時代晩期のものであると考えられる。果たして、この底部片の取り扱いには慎重さを要するが、SD 5が縄文時代晩期に属するものである可能性は高いものと考えられる。そして、当調査地の西側約150mの地点にある七尾瓦窯工房跡の下層遺構においても、検出部の狭小さから断定はされて

いないが、縄文時代晩期の遺物をともない流路跡とみられる落ち込みが検出されている。SD 5についても限られた範囲での検出であり、今後の調査によっては、同一溝内から時期を下る遺物が検出される可能性もあるが、これらは、これまで明確な縄文時代の遺構が認められていない吹田市にあつては、もっとも当該期の遺構として有力視されるものである。これら遺構の時期の特定については今後の調査に期待したいが、少なくとも七尾東遺跡・七尾瓦窯跡一帯においては縄文時代晩期に何らかの人的活動があつたことは間違いないであろう。



第 16 図 七尾東遺跡遺構図 (1 : 1,000)

写真1
第1次調査1



調査前風景（南から）



調査区（T1）近景（北から）



竪穴式住居の中央付近で検出された炉跡（東から）



竪穴式住居の中央付近で検出された炉跡（南から）

写真3
第1次調査3



竪穴式住居内の埋土の堆積状況



竪穴式住居の縁に沿って巡る溝（北から）

写真4
第1次調査4

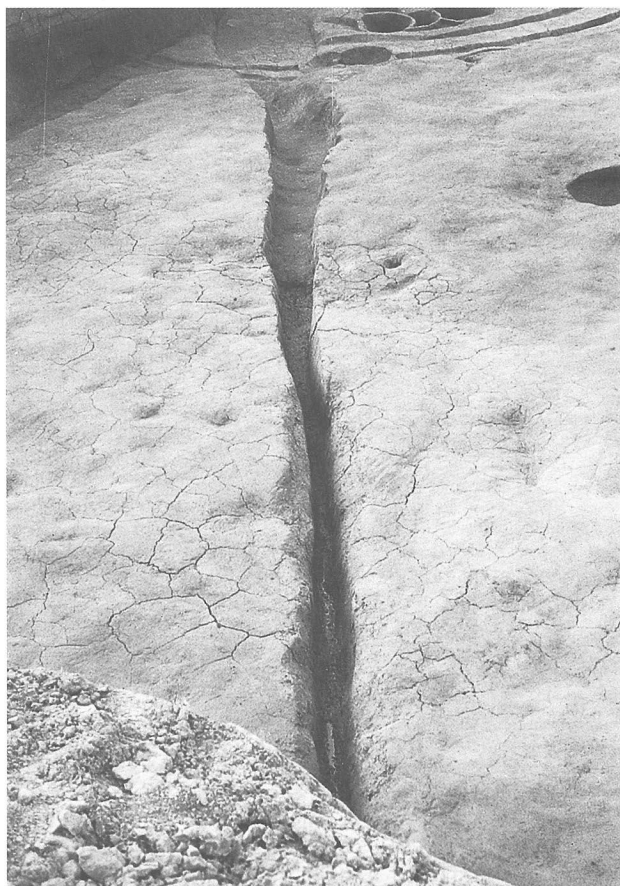


竪穴式住居の縁に沿って巡る溝と壁（東から）

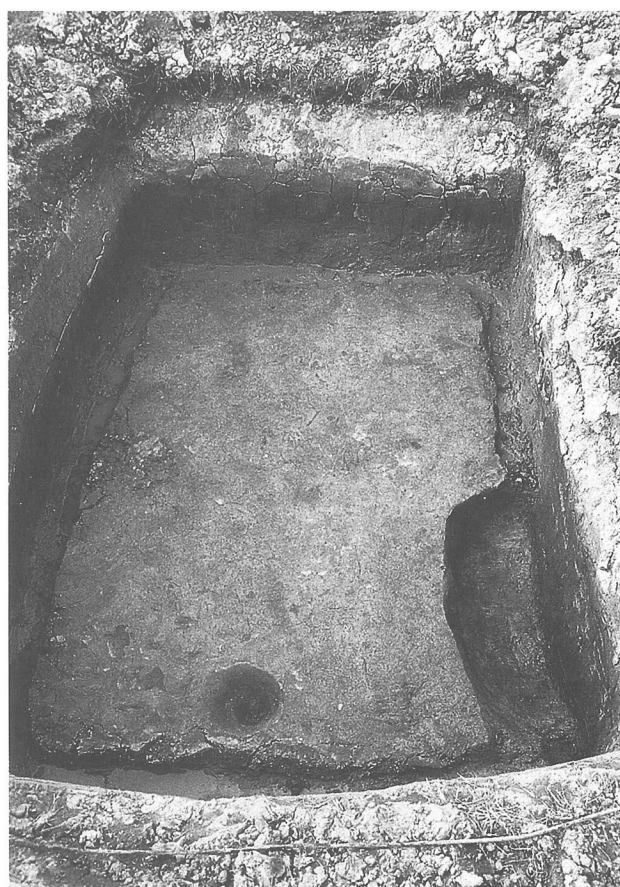


竪穴式住居と溝との接続部分（西から）

写真5
第1次調査5

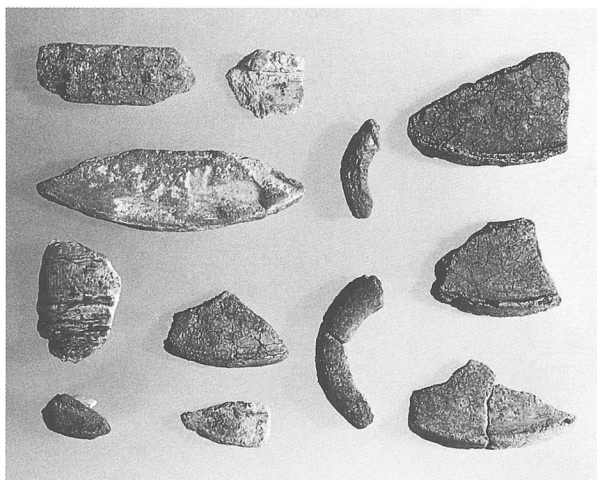
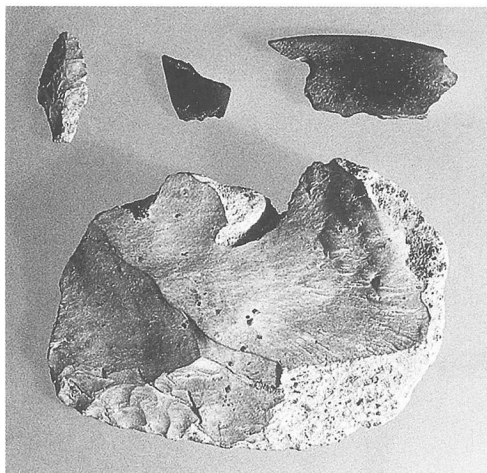


竪穴式住居と接続する溝（南東から）



調査区（T6）全景（東から）

出土遺物〈土器〉



出土遺物〈石器〉



現地説明会風景（西から）

写真7
第2・3次調査1

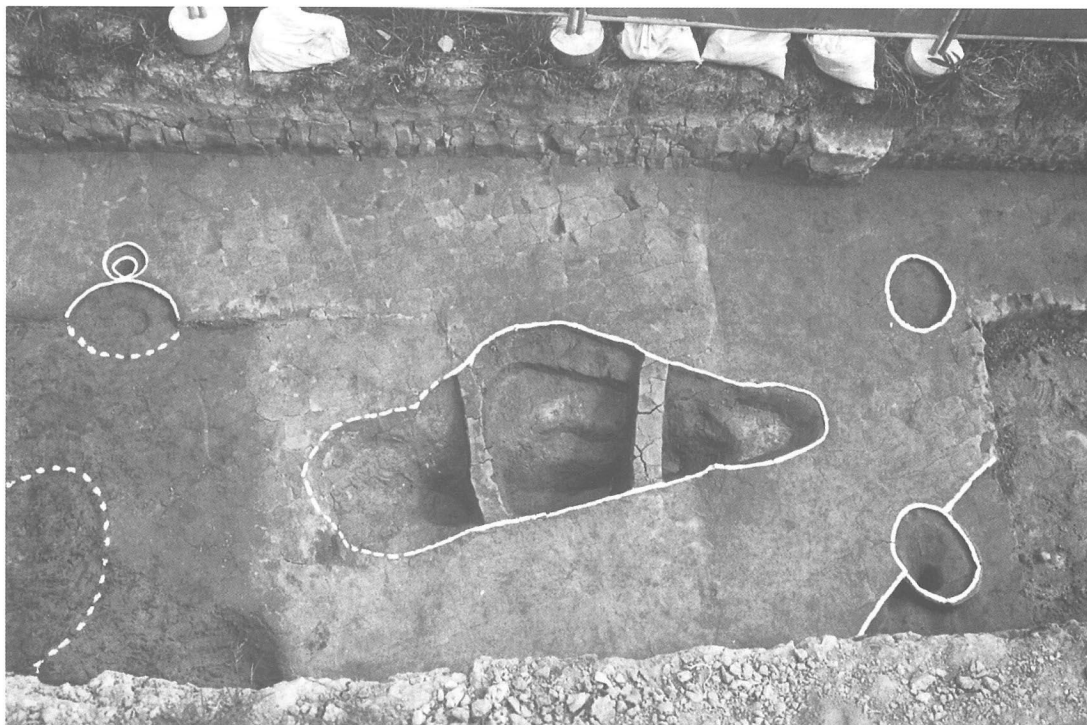


T 4 近景 (東から)



T11 西半 (東から)

写真 8
第 2・3 次調査 2

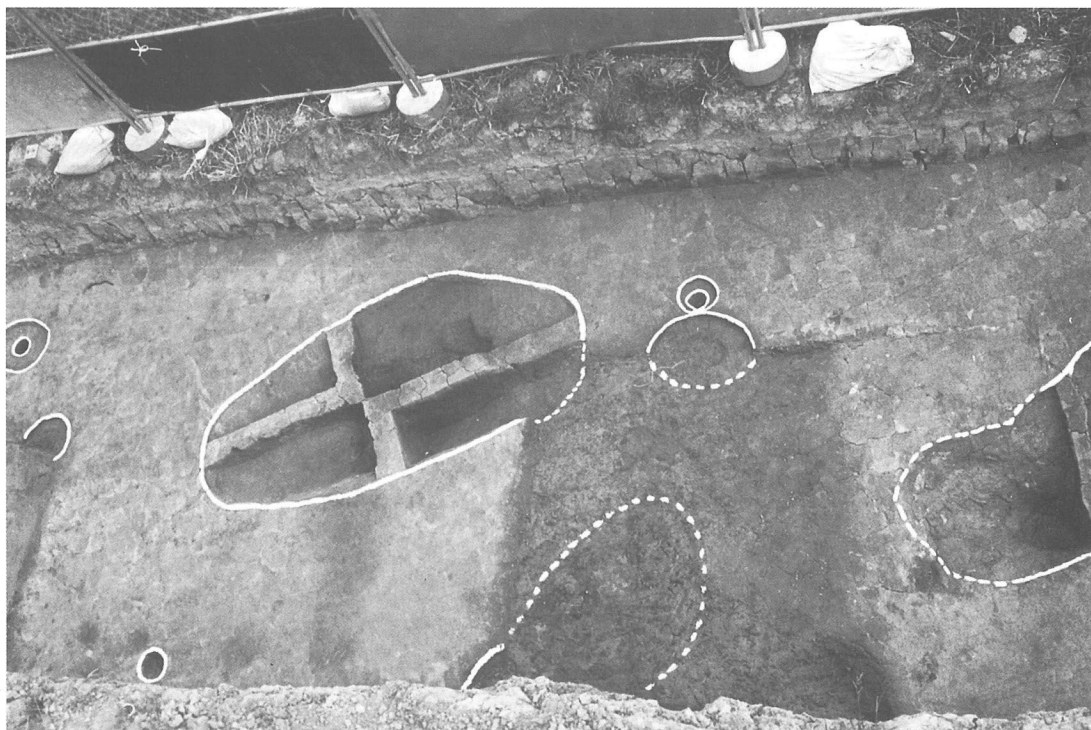


SK 9 (北から)



SK 9 堆積状況 (東から)

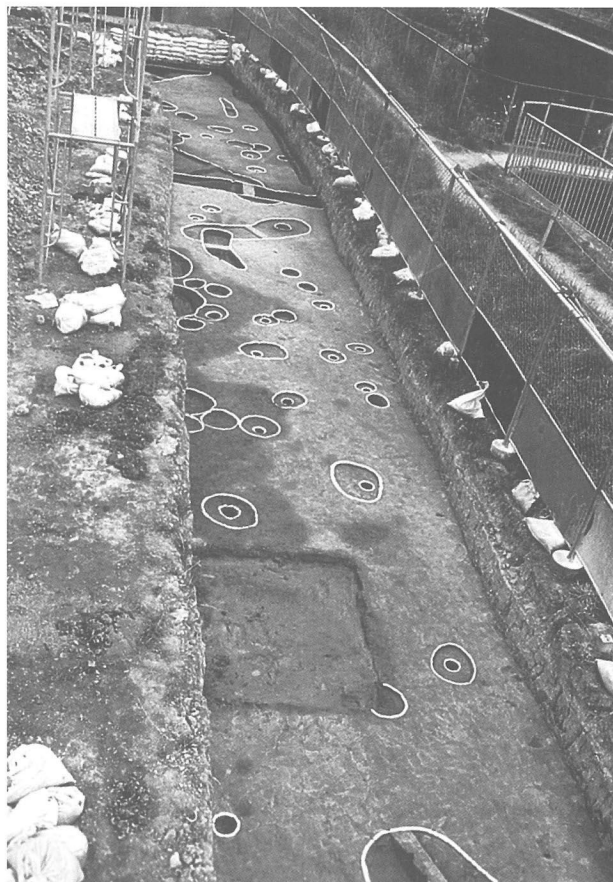
写真9
第2・3次調査3



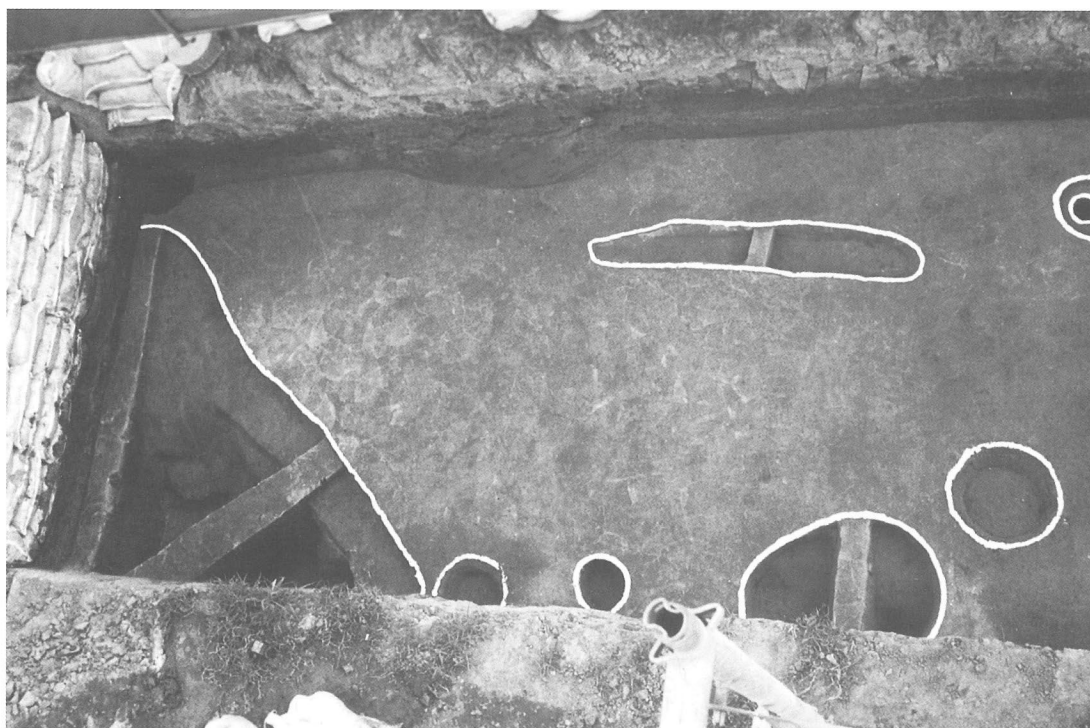
SK 11・SK 12 (北から)



SK 12 近景 (東から)



T 11 東半 (西から)



SD 2・SD 3 付近 (北から)

写真11 第2・3次調査5



T 8 近景 (北東から)



T 8 近景 (南から)

七尾東遺跡発掘調査報告書

—第1次・第2次・第3次—

平成14年3月29日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号

発行 吹田市教育委員会